



340
44

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

始



8.10.8

教訓資料
八の一生

343
44



大正布教文庫第一編

✓

340.44



立栗園著
人の一生

大正布教文庫第一編



は し が き

人の一生は重荷を負ふて遠き道を行くが如しとは、東照公の遺訓と聞きつれど、苦しき中に樂みあり、樂反て苦の本と悟つて見れば、此の世は悲視すべきにあらず、されば既に仲買となりて百萬の富を誇るものも、夕の株式下落に元の素寒貧となるものあれば、汗水たらしてエンサカホイ、勞働一番の上にての晩酌は、其の樂みや王侯に等しきが如し、觀すれば此世は憂世にてもあり又浮世にてもあり、浮いたくで一生を送るも、亦イヤダくで一期を果つるも、其人の了簡覺悟により、言はゞ神の示しか人の悟りか、頭を擧げて天の一方を眺むれば、眞如の月は必ず光あざやかに吾人の前途を照すを認めん、迷ふべからず、慌つべからず。

本書は予が數年來如上の見地より、諸種の新聞雜誌に筆を執りたる隨感隨餘を一括し森江店主の請に任せ、教訓資料として世に頒つに至りしもの、人の一生もかうした

ものか、浮いた中に、眞面目あり、眞面目の中にも滑稽あり、而してそれが一々吾人の立志處世の訓戒となる、取ると取らぬのは其人の随意なれば、取らずに苦しむよりも取つて樂むの勝れるに如かざるべし、假りに編を地位と修養、季節と修養、處世と修養と區別し置きたり、看る人幸に其の文體の前後一致せざるを尤むることなかれ、これも眠氣覺しの修養ともなりぬべし。

大正三年七月

栗園 迂人 識

教訓資料 人の一生

目次

(上編) 地位と修養……………一

【一】 參禪道悟 (悟道の三階段)……………一

【二】 軍人の覺悟 (武士道と勤儉)……………六

【三】 修學の目的 (賢哲の學生訓)……………一〇

【四】 主婦の了簡(家道訓)……………一五

【五】 婦人の座右銘(古今の比較)……………二〇

【六】 人生の三養生(身と心と家)……………二七

【七】 權利義務の誤用(法律と道徳)……………三一

目次

- 【八】 商人魂（アキナイ、マケナイ）……………三六
- 【九】 商業道德の必要……………四三
- 【十】 功過録（蓮池大師と正覺院僧正）……………五三

（中編） 季節と修養……………五九

- 【一】 歳旦の覺悟（堪忍御萬歳）……………五九
- 【二】 歳首の戒（一年の計）……………六三
- 【三】 節分の豆撒（立春大言）……………六七
- 【四】 彼岸詣（心身の保全）……………七一
- 【五】 雑祭の教訓（舊慣を善用せよ）……………七四
- 【六】 櫻狩（慈悲同情と名節）……………七八
- 【七】 初鯉（家道の戒め）……………八二

- 【八】 五月鯉（江戸つ子の本領）……………八六
 - 【九】 五月雨と田植（時雨と勤勞）……………九〇
 - 【十】 富士詣（孝道の獎勵）……………九五
 - 【十一】 午睡（和漢の逸話）……………九九
 - 【十二】 洪水雜感（天災と豫防）……………一〇三
 - 【十三】 菊花の教訓（品性の修養）……………一〇七
 - 【十四】 歳暮の戒（整理と勤儉）……………一一一
 - 【十五】 年の關（苦樂の境）……………一一八
- （下編） 處世と修養……………一二三

- 【一】 果報（福德圓滿）……………一二三
- 【二】 長命法（心身の養生）……………一二七

目次	四
【三】 時間の使用法（古今の教訓）……………	一三〇
【四】 財の使用法（經濟の消費）……………	一三六
【五】 堪忍の仕方（承へる力と押へる力）……………	一四〇
【六】 眼の着け方（快活と自重）……………	一四四
【七】 家計の取扱方（大括りと遺繰り）……………	一四九
【八】 思ひ遣り（他人の心中を付れ）……………	一五四
【九】 心の持方（謹戒十二ヶ條）……………	一五九
【十】 寡黙（猿智恵の戒）……………	一六四
【十一】 一家團樂（家庭の眞趣味）……………	一六八
【十二】 處世の五徳（自他に對する道徳）……………	一七三

教訓資料 人の一生目次（終）

教訓資料 人の一生

足立栗園著

上編 地位と修養

1 參禪悟道（悟道の三階段）

此項は紳商連の參禪とか悟道とかいふ事が流行するやうであるから、少し計り悟道の筋道を語つて見やう、然も六つかしい碧巖とか從容錄とかを引合に出すのでなく平民禪として一時舊幕に流行した心學の悟道を先づ紹介して見やうと思ふのである。白隱禪師が骨て野干達磨の圖に題された狂歌があるが、これは古今の野狐禪を罵り盡したものである

參禪悟道

達磨じやと云てくしたが見て呉やれ

むじな顔した野干道心

乃公は最早開悟したと乙に澄して無事な顔付をして居つても、心は慾の爲に有事に忙殺せられ紛殺せられて眼色までがキョトクして居る野干道心は何時の世にでもあるもので、參禪の座敷が株の賣買談で持切りのやうでは、それこそ有事どころでなく、正に斯道を亂す一大事といつてよいのである

閑話休題として、心學にては悟道の階級を三期に分けた、第一期は解悟即ち了簡悟りといふので、觀心工夫の説法を耳にして成る程と合點した時期をいふのである。第二期は證悟即ち見届け、悟りといふので、心を潜め念を澄して忽然として虛明の體を見つけた時期をいふのである、第三期は徹悟即ちほり悟るといふので此境界に達するのは中々六かしい、それは既に證悟して心も清明になり萬の煩惱に遠ざかつて、之を其未だ悟らざる以前に比しては抜群の功能があるけれども、尙是非得失に涉つて心穩

かならず、折角見付けたる虛明の體も屢々失ひ易く、力を用ふることも多年にして、益々自在を得ず、是に於て勇猛一番更に工夫を加へて精根を勵まし、左思右想、堅究横求日夜を重ねれども、更に進まず、譬へば銀山鐵壁に向ふが如く一步も進むことを得ず武士でいへば弓折れ箭盡きて如何とも證術なき際に至つ、忽然として諸見盡き、萬念泯び、本來無事の心體に反る時に、銀山鐵壁も忽ちに破れ、善惡是非の見跡を掃ひ、遂に無事清閑の處に到る、之を徹悟といふと古人も釋して、之が即ち心學の致知の極功であると説明してある

かくいへば世智辭の徒は、それでは悟道なごいふ事は日常事業に忙殺さるゝ者の携はるべきものでもなく、又携はつたどて功能がなからうと早くも逃足にならうが、それが抑々間違つて居る、悟道と事業とは關係の頗る密なもので、事業が煩忙なもの程其心が轉倒し易い、之を轉倒せぬやうにするのが悟道、心に叶ぬ事があつて辛氣な時でも、其私心を去て無事に歸り得るのが悟道、腹の立時には其立腹の心を拂ひ憂患の時

には其憂患の思を除いて無事に歸るのが悟道で、多忙なる者ほど其必要は存して居るのである、所謂道の修行といふのは此處の事で、世事と悟道とが別個のものであれば最早修行の必要なく、參禪の要もないのである

手島堵庵が示した語がある「一念歇得とは念をやめにするといふ事也、念をやめんとするともそれはならぬ事也、思案の私が差し出ねば念が發りてもかまひにはならず、其念は即ち本心の光明ゆへ、念が發つたとも、思ふとも思はぬとも覺へず知らぬなり、諸人をしなべて歩く時あるくべしと思はねば歩まぬなり、然れども遂にあるく時あるく〜とおもふとは覺へず、それにて知るべし、其念は無念の念とも正念ともいふなり」と、これが即ち悟道の要で、さどろ〜と思ふて本心までも失つて、車上にて放心して落ちた杯といふのは、それは悟りではなくして放心失念である
古歌に「引寄せて結ばば柴の庵にてとくればもとの野原なりけり」「雨霰雪や氷とへだつれど落つれば同じ谷川の水」などといふのがあるが、之は既に理窟に陥たもので

推量惑の歌である、若しそれ身なきことを自得したならば、左の如く了せねばならぬ、

引寄せて結びし芝の庵をも

解かて其まゝ野原なりけり

雨霰雪や氷を其まゝに

水と見てこそ解くるなりけり

此が世事と悟道との關係を示したもので、若し事業は事業で忙殺され轉倒し盡して笑ひを遣し、一方に殊勝らしく尤もらしく參禪したとて何の効もないのである、即ち實業家でいへば百忙裡にも其心泰然として狼狽せず、又榮利堆に在つても慈悲心を存して社會を益し他人を救ふといふ境致に達したのが即ち悟道を遂げたる紳商である、これに達するには其の忙殺紛殺の裡に開悟の修行をせねばならぬのである。

とである、主人に對すれば主人に成り切る、親に對すれば親に成り切る、それゆへに直に眞忠、眞孝で、故らに忠孝をいはずして自然に忠孝を行ふに至るのである、これで行なければ決して商店の白鼠裏店の孝行子息は出ないのである、元政上人の歌に「咲く花を歌によむ人、ほむる人、咲かせる花の本を知れかし」といふのがあるが、人は其本を忘れずして本心を見究めるが大事である、本心を見究めて之が指揮にのみ従ふやうになれば始めて悟道の人と稱され得るのである

2 軍人の覺悟 (武士道と勤儉)

軍人の悟といへば是非武士道と勤儉との關係を説かねばならぬ、武士道といふは必ずしも四角四面な理窟をこねたものでなく、實行上に就て己が心身の嗜みを第一と心掛けたものである、それゆゑに武士道に勤儉は殆どクツ付きもので、北條九代の基も、徳川十五代の礎も、皆この勤儉を奨励したものに過ぎない、古人の書殘した「武

士としては」といへる寫本の内に

武士はいか程、金銀米錢ありても、盡くる期あるものなれば、常に入らざる飾をせず、勿論分限を知て奢らず、武の法道を嗜むべき事

と、先づ其平生に於ける處世上の覺悟を示し、次に世上雑多の誘惑に牽かされぬやうにと戒めて居る、其戒の一に

目に見る所に奪はれて悦ぶべからず、耳に入る所に取られてあわつべからず、口にあふ所に引かされて親むべからず、鼻にかぐ所にだまされて迷ふべからず、人の譽むるは、そしるの基、其誠を能く知て、我があやまちぐせを聞き、心に覺えて、人のそしりを聞くべし

といふのがあるが、如何にも名言で、今日の軍人などの最も服膺すべき訓戒と思はれるのである、一體、治に居て亂を忘れぬといふのが、武士本來の覺悟でなければならぬのであるが、古往今來、兎角治平の代には文弱に流るゝ武士が多いものである、そ

こで白川樂翁侯が嘗て此状態を歎いて

小手のうへに降りしを知らで厚衾

かさねて夜半の霰をぞ聞く

とよみたまふた事がある、之は鎌倉右大臣實朝朝臣の「ものゝふの矢なみつくろふ小
手の上に、あられたばしる奈須のしの原」の歌に基いて、武士を戒飭せられたる勤儉
歌に外ならぬのである、即ち俗間の狂句にある

御先祖に討死させて高枕

といふのと同意である、所が今日は御先祖ごころでなく、親や兄弟に討死させて置き
ながら、其功勳で奢侈の限りを盡すなどといふ馬鹿息子が少からぬを聞くのは如何に
も歎はしい次第である

少しく古武士の心構へを示して見やう

一武士を立て候内は、意地さたなく汚れたる心を持たず、諂ひ追従して腰抜け、輕薄

者の下風に立ちて、富み榮ゆる事は、武冥加の盡さんはし也、時に至り、たとひ土
民に落ぶれ、手づから火を焚き水を汲むとも、義理次第の事にて候は、是非なく
候

一心は石か金の如くに堅く、玉の如くに潔くして、上むきは何となく世を渡るべし、

刀脇差もぬき身にてはさゝれず、鞘をして上むきは、何ともなきもの也、數ならず

とも、父祖を忘れず、家名に疵の付ぬやうに、心をけがすまじき事也

一武具、馬具、旅道具まで心を付け、油断なく、より／＼に拵へて、第一嗜むべし、

右のたしなみ道具も事缺かぬ程ならば、華奢風流の道具も成合にいやしからぬ様に

もしあそぶべし

一物毎すぎ過ぐべからず、好きに隨へばそれしやの様に唱へられ、片よるもの也、器

物まで餘り好むべからず、藝能より財寶までも、大方にあれかし、好き過候へば、

よき事も身の仇となるなり

これ等の文字は實に今日の軍人社会にも適切なる訓戒であらうと思ふのである、即ち軍人たる者は義を専一として其身を持し、心は鐵石の如くにして、而も交際上にて温和を旨とし、加之父祖を忘れず家名を重んじ、武器を嗜みて遊藝風雅に耽らず、至極淡泊廉潔を以て世を渡るべき筈のものである、徒に阿諛諂佞に長じ華奢風流に流れ、上官に媚び婦女に悦ばれんとを希ふ如きは、尅々たる武夫の面目でないとは、固より吾人の言説を待たない。特に古の武士は貧といふ事を苦にせず、勝手向き不如意でも華奢の道具を賣拂ふて體面を繕ひ、朝夕の食事に汁をそへて食ふ間は貧したとは言はず、召仕を使ふ身にて兩度の食を一食に減するに至て、僅に其不自由を友に語つたものである、此毅然たる氣概がなくては決して軍人武士といふとは出來ないのである。

3 修學の目的 (學生訓)

今の學生の迷ふ所は何であるかといへば、一方に富貴を得たいといふ欲望と、一

方には智人賢者となりたいといふ欲望とが終始心に戰ふて居ることである、古語に「二兎を逐ふ者は一兎をも得ず」といふ如くに、以上の兩者は逆も十分に併せ得らるゝものではない、學、東西を究めて蘊奥に達せやうと思はれ、どうしても金錢上の事には迂からざるを得ぬのであつて、富、一國に冠たらんと希ふたならば、學者賢哲と稱せらるゝことは到底不可能である、之はどちらかの一步を得ることを期待して一生の目的とせねばなるまい。淮南子といふ書物に學生の服膺すべき奇話が載せてある。一日子夏、曾子に見え、一たびは臞せ、一たびは肥えたり、曾子其故を問ふ、曰く、出でて富貴の樂みを見て之を欲す、入て先王の道を聞きて又之を悦ぶ、兩者の者に戰ふ、故に臞す、而も先王の道終に勝つ、故に肥たり」と、これは所謂子夏が方今の學生の如くに富貴と賢哲との二欲望に迷ふた心の煩悶を寫し出したものである、然し有繋は子夏ほどの才物ゆえに、兩者の決して併せ得らるゝものでないことを悟つて賢哲の人たらんことをのみ希ふたのである、方今の學生の悟を開くといふのも、畢竟これに過ぎ

ぬと思はれる

所で更に言ねばならぬことは、一たびは以上の迷を去て、學者とか或は金持とかの一方にならうと目的を定めた所で、堅忍不拔の精神を以て、世の障碍に打克つて行くといふことを覺悟せねばならぬのである、然らずんば、一たび定めたる目的は又もや動揺して迷ひ始めるのである、之に就ても亦一つの昔話を借て來やうならば、郁離子の奇話中に下の如き面白き譬喩がある

鄭の鄙人、蓋をつくることを學ぶ、三年にして藝成りし時、大に早して蓋を用ふる所なし、乃ち棄て、桔槔をつくる、又三年にして藝成りし時、大に雨ふりて桔槔を用ふる所なし、即ち又還りて蓋をつくる、未だ幾くならずして盜起りて民盡く戎服を改めて、蓋を用ふる者あること鮮し、此に於て兵たることを學ばんと欲するに既に老いたり

此譬喩は實に現今の學生の記憶すべき訓戒であらうと思へるのである、一たび文學者

たらんと欲して成らず、更に數學者たらんと欲し、或は法律家たらんと欲して成らず終に軍人たらんと志すも其年老いたり、といふと同じことである、これは畢竟世の障碍に打克つ所の、堅忍不拔の精神といふものがない爲の失敗に外ならぬのである、尙ほ更に學生の服膺して居らねばならぬ事は、僅に其學成りしとて、直に顯榮を得らるゝものでなく、富貴を得らるゝものでなく、又名聲をも馳せ得るものでなく、二十年一日の如く、自己の任務に精勵してこそ始めて、顯榮も富貴も名聲も、漸くにして其の幾分を得らるゝものなることを記憶せねばならぬことである、一體、人生の至樂といふものは蘇東坡も言つた如くに、身に病なく心に憂なきを過分とせねばならぬ、如何に顯榮を榮め、富貴を得ても、始終病身であつたり、憂愁の絶なかつた日には、人としての愉快は決してないのである、然るに萬人中の一人位の得らるゝ地位を争ひ望で、己れ之を得られぬとて失望し煩悶するのは、恐らく非望といはねばなるまい、それよりも萬人が萬人ながら、勉めて必ず得らるゝ所の善人となり賢者となるこ

とを所期するものが、人の至當なる目的でなからねばならぬのである、邵康節の詩に下の如きがある

花木四時分景致。

經書千卷號生涯。

有人若問閑居處。

道德坊中第一家。

これは所謂康節が名利に淡く、其善人たり賢者たることを目的として、悠悠一生を送つた心狀を表曰して居るものである、又中江藤樹の偶成にも下の如きがある

獄外在獄納世界。

名利傲意其四壁。

哀哉世間多少人。

拘繫這裡長戚々。

所謂世間多少の人は、自ら好んで其身を獄中に投じて居るやうなもので、常に名利と傲意とを四壁にして、哀れや其内に獨り戚々と傷み悲み、悶へ苦んで居るのである、大觀して見ると如何にも、馬鹿馬鹿しいではないか
然し聖賢ならぬ凡人は逆も康節や藤樹の真似は出来ぬとしても、それ／＼其地位境遇

に晏如として勤勉自ら慰め自ら樂む所がなくてはならぬ、明人の陽東谷といった學者が之に就て下の如き事を言つて居る

學者は中等の屋に居り、下等の衣を着、上等の食を食へ、何となれば茅茨土階は今
の宜しき所にあらず、瓦屋八九間、僅に圖書を藏めて足れり、故に中等の屋と曰ふ
衣は必ずしも綾羅錦繡ならず、夏は葛、冬は布、僅に寒暑に適ふて足れり、故に下
等の衣と曰ふ、飲食に至ては、則ち當さに遠く名勝の物を求めて、山珍、海錯、名
茶、法酒、物物備ふべし、庶くは凡流俗士たらざらん、故に上等の食と曰ふ
これは一寸ハイカラ的な旨い事をいつたものであるが、方今の學生學者は兎に角先づ
此の位の所にて満足せねばなるまい

4 主婦の了簡 (家道訓)

家道の富み榮へるのも或は一家の平和團樂を得るのも、要するに主婦の心掛如何

に因るといふことは、今更吾人の喋々を要せぬ所である、さて其心掛といふことに就いて、今も昔も人情に變りはないゆゑに、成るべくは衣食住の三つを立派にして行きたいと希はぬ者はないのであるが、さらばといつて富といふものは元來十人の中の一人が之を得るとすれば、残り九人は得られぬに極つて居るものである、それで富を得られぬといふ事に不平を抱くならば、古往今來一家に平和といふことは成り立ちさうにもないが、それが必ずしも然らずといふのは、ツマリ俗に所謂諦らめといふ心掛が存するからである、今日の成功論者に言はせると諦らめなご、いふは、實に卑屈・因循極まると排斥するかも知れぬが、實際世上の事は、思ふに任せぬのが九分九厘で、所謂不成功者が十中の八九を占めるのである、然も此思に任せぬ所に安慰を與へ、不成功者の家庭内にも和氣靄然たらしむるのが、即ち家庭に必要な教訓である、若し然らざる限りは、如何に千言萬語しても、其説く所は吾人の修身齊家上に寸益を與へないのである。

それに就て、實に面白くして奇抜なる古人の心掛を話したい、昔し泉州堺の町に夫婦暮しの貧しき商人があつたが、二人共稼ぎの結果、二十幾年にして遂に大商人となり家富み榮えて手代の四五人も使ふ身代となつた、然るにも拘らず、細君は依然として元の衣服裝飾に甘じて所謂外出の風儀も變へない、そこで亭主がホト／＼其心掛に感心をして、少は女の嗜む衣服裝飾を新にしてはと勧めたけれども細君一向に聽かない、而して曰く天子將軍様杯より我々の身分を見れば今日の衣服調度でも結構過ぎる程である、されば妾は決してソンの事に心配はして居らぬといふ、そこで亭主殿愈々感に堪へたのであるが、一日又折に觸れて其事を言出すと細君の答に「實は此間はアノやうに申したものの、妾とても女の事欲しい物は欲しいに極つて居りますゆゑ、良人に内證でコツソリ拵えて箆筒へ仕舞つて置きました」といつた、それを聞いて亭主はアキレ返り、矢張りあまへも世間普通の女で少しも話せぬといひながら早速箆筒を開けて見た所が、天鵝絨、毛織、緋緞子、緋ざやと其當時流行の吳服衣裳の名が紙片

に書き付けてあつて、現物は一つもない、其亭主の二度吃驚の顔を眺めて細君は「今朝も門を通る女中の衣服が實に羨ましく存じました故、早速に二ツ三ツ拵へて、其簞笥へ仕舞つて置いたのでありますが、元の身分を思へば、どうしても着る事が出来ませぬ故残らず仕舞つてあるので御座いますといつた」から亭主は實に其心掛の非凡なのに感歎を禁じ得なかつたさうである、此細君の心掛は、吾人が古書を讀んだ中で一番感じた事實である、世間普通の婦人は他人の美服を見ては之を羨ましがり早速真似をする、少々綿入りでも、一見綺麗で誤魔かしが付けばど、無理に主人をイビツて流行の衣服を新調する、而してそれを簞笥に仕舞つて置く、知己や友人に其数の多きを誇る、それが唯一の樂みであると思はれるが、若し此婦人にして前の婦人の心掛を聞いたら正に愧死せずには措かれまいと思ふのである。

又今一つ反對なる事實談がある、之も昔し一人の農夫が貧しき暮しながらも、毎日夙に起きては神を拜し、我に幸福を與へ賜ふて有難しと感謝する、それを細君が大層不

満に思ふて一日主人に向ひ 良人は何時も幸福々々として神様に御禮を申されますが、妾は少しも幸福とは思つて居りませぬ、軒には草しげり、床には藁蓆を敷き、食ふ物は雑穀、纏ふ物は粗布、そして良人は終日田島に勞し、妾は炊事に暇なく、其上春より冬にかけ、朝より夜に及ぶまで紡織裁縫をして、少しも樂しい事はないではありませんか、不平の數々を列べました所が、主人は之を聽いてアキレ返り、おまへも物の辨へといふ事を知らぬ人だ、無事息災に病なく禍なく、達者にして暇のないのが元來百姓の幸福といふ者ではないか、勿論おまへが高貴の生れでかゝる田舎へ零落をしたといふのならば、そんな不平もあらう不満も起らう、然し腹からの賤の女ではないか、賤の女が賤の家に育つて、賤の衣を着、賤の食を食し、賤の業を營むのが、何の不思議であらう、よくよく其處を考へなさい」と懇々諭されて、初めて其婦人は日頃の不心得を悟つたといふことである。

此話は前の話とは正反對ではあるが、然し前に所謂諦め即ち知足の必要といふものを

了解するのに、最も興味多き教訓である、我が家祖の爲重といふのが享保の年に残された和歌に下の如きがある、之を服膺して自分は何分も不平不満を抑へて居るのであるが、所謂知足の説明に外ならぬのである。

何につけ直に望の叶ふなら

不足は多し樂みはなし

何につけ思ふばかりで叶はねど

叶ふにまさる多き樂しみ

吾人は知足を以て家庭唯一の心得と信じて居るのである。

5 婦人座右銘 (古今の比較)

古歌にもある通り「人心鏡にうつるものならば、さぞや姿の醜くかるらん」とて、古への賢明なる婦人は常に鏡を身嗜みの唯一の道具としたのみならず、心の嗜み

の最上なる道具とした、その心掛から或る婦人が自ら日常の箴として座右に供へたといふ十三ヶ條を見るに、今日といへども決して渝ふべきものでなく、大に服膺すべき節々があるやうに思はるゝ、そこで少しばかり註釋を加へて之を家庭内へ御勧めしたのである。

然らば其女子の戒十三ヶ條とは如何といふに左の條々であります

- (一) 透見 (二) 亂れ髪 (三) 分別顔 (四) 物争ひ (五) 男の好惡話 (六) 大酒
- (七) 奢修 (八) 遊山好き (九) 多言 (十) 短慮 (十一) 高聲 (十二) 芝居好き
- (十三) 寺参り好き

○透見のよろしからぬことは固より論ずるまでもないことであるが、今も昔も襖の蔭や障子の穴から來客を透見して私語喃々してきはごひ此評を加へるといふのが、我國婦人界の一の弊となつて居る、西洋室の締切り主義にも頗る弊害があるけれども、日本室の透見主義も恐らく人をして不快の感を與へることが少からぬであらう、之は戒

めねばならぬことである

○亂髮の不心得は、これ亦言ふまでもない、今日は大分だいぶんに女壯士にょさうし的てきの亂れ髪みだかみが廢すたつたやうであるが、然し廂髮ひきしげみのわざと壞こわれたのを喜よろこぶといふのは、當人意氣たうごんいきと心得こころえての積つりか知らぬが、どうしても南洋なんやうあたりの蠻はん的てきである、或老人あるらうじんが孫まごの此狀このじやうを見て、どこで喧嘩けんかをして来たかど心配しんぱいして尋ねられたといふのは萬更無理まんざらむりでもない、兎角とかく一身しんの不嗜ふたしなみ一家いっかの無作法むさぽうを示し、父兄ふけいの不取締ふごりしまりを表白へうはくするやうなものであるから、これはどうか相戒あいましめて、婦人ふじん一通りいっほうの櫛くしりだけは毎朝まいあさ厲行れいこうして貰もらひたいものである

○分別ぶんべつ顔かほに至いたつては、古人こじんよりも今人こんじんの方がどうやら増加ぞうかしたやうに思おもへると去さる老人らうじんは言いつた、蓋し男女だんぢよに拘かはらず、謙遜けんそんの美德びとくであつて傲慢ごうまんの惡徳あくとくであるといふことは誰たれ承知しょうちせぬ者ものはないのであるが、兎角とかく分別ぶんべつを鼻はなの先さきにブラ下さげたがるのが人の通弊つうべいで、婦人ふじんに少すくなからぬやうである、古人こじんの學問がくもんは飯いひのやうに腹はらに納おさむべきもので軸物かきもののやうにブラ下さげて人に見せびらかすものでないといつたのは極めて至言しげんである、又古人またこじんが

學問がくもんは臍へその下したに收をさめて善よし、鼻はなの先さきに下さげて惡わるしといつたのも妙言めうげんである、婦人ふじんはごうか一層いっそう温良おんりやう貞淑ていしよくにして分別ぶんべつ顔かほならぬこそ其奥床そのおくゆかしさが増ますのである

○物争ものせうひは俗ぞくに姫御前ひめごぜんのあられもないと後指うしろゆびさゝる、惡弊あくべいで、今日こんにちにても時々ときとき演出いんしゅつせらるゝやうである、特に父兄ふけいや良人らうじんに楯たてつく婦人ふじんに至いたつては一層いっそう其弊そのべいの極きよくに達たつしたものである、嘗かつて女髮結おんなかみむしの店みせで、大騒おほさわぎをやつたのを或田舎人あるいなかびとが魂たまげて、アレは女嚙合おんなかみあひ所しよでありますかと、振假名ふりがなの飛とんだ間違まちがひをしたといふ滑稽話こつげいばなしもある、畢竟ひつぎやう此弊このへいきよくは局量りやうりやう狭小せうせうにして寛容くわんようの徳とくを缺かく所ところより起おこるものゆゑに深く戒いましめて貰もらひたい

○男おとこの好惡こうお咄はなし、是これは申まをす迄までもなく婦人界ふじんかいの通弊つうべいであるが、自然主義者しぜんしぎしやとか戀愛神聖れんあいしんせい論者ろんしや間かんには近頃ちかごろ一層いっそう甚はしいやうである、才子佳人さいしやうじんの品隣ひんりんはする人ひとぞする、年若としわかき婦人ふじんなごの心痛しんつうすべき限かぎりではなからう

○大酒だいしゆに至いたつては其害そのがいたる言いふまでもなき事ことで、婦人ふじんのへべ六へべろく、へべ七へべしちと來きては固こよりお話はなしにならぬ、これは酒好きさけずきの婦人ふじんにお檢しらべを願ねがうより外ほかはない

○奢侈に至ては古往今來家庭間に免れ難き悪弊であらう、何も身分地位に應じて衣食住の慾を満すのを悪いなどいば申さぬが、兎角適度を失うて、奢侈となり贅澤に陥り終に城を傾け家を覆へすに至る、其水上を尋ねると、ごうも婦人の了簡一つに胚胎して居るやうである、是はごうか必要と贅澤、實用と華美といふ區別をよく／＼腦裡に疊み込んで貰ひたいものである、況んや戦後財政の困難なる今日、勤儉以て國富を増し國力を回復せねばならぬ秋なるに於ておやである

○遊山好きといふのは、今日に所謂出歩き好といふに當つて居る、言ひ換へれば保養好き過ぎるのを指すのである、何も交際上時折氣保養をするもよし、必要の場合には出歩くのも妨げぬことであるが、之も其度を過すと、矢張一種の弊害を生ずるのであつて、餘り譽めた方でもない

○多言、これは東西古今婦人の缺點であると思えて、あらゆる書物に其戒が載つて居る、男子といへども無論多言は其身に禍するのであつて、口は禍の門との古諺は

どこへ行つても大威張である、所が必要の場合にはムツチリで頗る要領を得ず、必要ならざる場合に甚だしくオシャベリであつて、馬鹿に暗しいのが婦人の缺點であるらしい「言はぬは言ふに愈や勝る」などいつて目に物を言はせたり、願に承知させながら、「こゝぎりの話と矢鱈ふれ歩き」など入らぬ所に口が出しやばる、西哲の言に「愚人の心は其口に在り」などいふのがあつて、全くこゝの戒である、これは吳々も戒めて貰はねばならぬ

○短慮、俗に所謂氣短で、古人も言つた如く兎角大功を成さぬ奴である、所で勸忍袋の緒が切れるといふ程の一大事の場合ならば、人の意氣地といふこともあるが、さもない小事に目に角を立て、怒るのが婦人の弊である、古歌に

かくせごも角のあるゆへわらははべに
棒だせやりだせまい／＼つぶり

といふのがあつて、婦人にして角なくんば決して短慮は出ぬ筈である、特につまらぬ

事に愛憎好悪を分つゆゑに知慮も起るのであつて、これは思慮ある婦人の決して爲すべきことでない

○高聲といふのは今も昔も、キャツ／＼と高笑ひしたり、大きな聲で近所隣をドナリ廻ることであるが、身分を重んずる婦人の決して爲さぬ所である、故に之は深くは尤め立てせぬ、然し兎角調子に乗つたり自分の手柄話しなどには、往々此弊に陥り易いものゆゑにこれ亦呉々も慎まねばならぬ

○芝居好き、これは古今に異りはないが、交際とか慈善會とかいふことが盛になつた今日の方が一層流行を來して居る、これも據なき場合や時折の保養には最もよい楽しみであらうが、其度を失うると飛でもない間違の基となることは、新聞紙にでも小説にでも載つて居ることで、今更説明するまでもない、極端に言へば芝居を見るのでなくて役者を見ろといふことが即ち此大間違の根本である、之は深く戒めねばならぬ
○寺参り好きといふのは、今日にては老爺老媪の仕事のやうになつて、左したる弊害

はないと思ふのは大間違ひ、妙齡の婦女子が有難い御説教を聴きに行つて煩悶の種を蒔たり、教會詣りに浮身をやつして青年男女の交際とかを覺える如き弊害は此頃數へ切れぬほどあるのである、これも願はくは其の人格を養ひ徳行を積むといふ目的の爲に實行して貰いたいもので、種々の悪方面に利用することは眞平御免を蒙らねばならぬ
かく述べて來ると古人の戒も萬更棄てたものではない、といふのは古も今も同じ人間で、同じ慾を有し、同じ色を愛で同じ香を愛する故である、唯だ時勢に應じて其飛び出す方面を異にする故に、其適度を誤まらざるやうに各人の嗜慾を節制せねばならぬのである。

6 三養生 (身と心と家)

人生の福祿壽といふ事は古來言ひ舊した語であるが、今日とても世人の欲求する

所は此三ツに過ぎないのである、即ち富を得、地位を得併せて長命したいといふのであつて、青年が勉強するのも要するに社會に於ける好地位を得たいため、實業家が勤勉をするのも先づ一家を富ましたいため、世人の總てが衛生とか養生とかを喧ましくいふのも畢竟は長命を欲するため外ならぬのである

然し之を得たいと漫に望むばかりで、之を得るの方法を講じない時には、逆も以上の三ツは容易に得らるゝ者ではない、切言すれば之を得るの本を勤めねばならぬことである、然らば其本とは何ぞやといは、之は説明するまでもない、富を得んには勤儉をせねばならぬ、地位を得んには精勵をせねばならぬ、而して長壽を得んには心身の保養をせねばならぬのであるが、吾人は兎角「果報は寝て待て」主義で、棚から牡丹餅の落ちて來るのを待つて居る、かくては逆も運の向いて來ることはないのであつて運即ちハコブ、メグラスの字義に對しても甚だ相濟まぬことである

之に就て古人は面白い事を言ひ殘して居る、即ち福祿壽の三ツを得んと欲する者は、

須らく三養生と勉めよといつて居るのである、其三養生とは何ぞやと問はゞ(一)身の養生(二)心の養生(三)家の養生と答へて居るのである、少しく其古風の文字を紹介しやう

- (一)身の養生とは御公儀を恐れて御法度を守り、病を恐れて酒食房事を節にし、風寒暑濕を防ぎて外邪を通れ、起居歩行を靜にして怪我過ちをせざる事なり
- (二)心の養生とは常に怒と慾とを堪へ心に耻かしと思ふ事をなさざる事なり、心は清淨にして形なし、故に之を養ふも食を以て養ふこと能はず、義を以て心の食とす、義は宜なり、時の宜しきを得て、心を辱かしめざるを義といふ、義を以て心を養ふ時は愧なくして樂み深し
- (三)家の養生とは家内和合して家業を精出し儉約を守りて吝嗇せず、入金より出金を少くし、萬一不時の災難にて出金より入金少ければ、外見を厭はず、暮し方を逼塞にし、貧乏に先立て困窮すべし、斯の如く身を慎みて儉約すれば、天の恵みを得て

相應の財寶を貯ふ身となるべし、財寶足らば其家全く長久なること疑ひなし
 右三養生は鼎の足の如し、心病む時は身を傷り、身病む時は家を傷り、家病む時は
 心を傷る、めぐりめぐりて環の端なきが如し

此は心學大家手島堵庵が唱へたのを、水野澤齋翁が更に養生執心の病客に示すとて、
 筆にせられた教訓であるが、如何にも奇抜なる節がある、特に身の養生、心の養生は
 今人も大分氣付いたやうであるが、家の養生に至っては、未だ悟り切らぬ者が多いやう
 である、即ち假令心身の養生を勉めたとしても、若し家の養生を勉めずして、一家和合
 せず、勤勉にして儉約を守るといふ事を疎かにした時には、所謂三養生の循環して
 相互に影響する如く、一家の治まらぬために心神を傷りて煩悶し苦痛し憂鬱し、果は自
 暴自棄して身體の健康を害し品行性格といふものをも墮落せしむる原因となるに相違
 ない、して見れば家の養生といふことは今人の最も戒めねばならぬことではない
 か、況んや戦後財政の困難なる今日に於てをやである、若し夫れ以上の三養生にして

併せ修め得たならば、世人の欲求する福祿壽の三ツは必然の結果として之を收得せず
 には措かないのである

7 権利義務の誤用 (法律と道徳)

近頃の人は権利権利といつて、無暗に権利を振り廻したがる、恰かも古武士が鎗
 術劍術といつて矢鏢刀を振り廻したがつた如くである、諺にも『生兵法大疵の本』と
 いふ如く、此権利も振り廻し過ぎると、其権利でアベコベに自分自身を傷つけること
 となる、これは吾人の大に慎み戒めねばならぬ所である

権利といふ語は、維新後の新熟語で英語の『ライト』といふ語を譯したものといふ、『ラ
 イト』は我が俗語で『正しい』といふことで、正しいことは固と道理になつた言分
 に相違ないから、そこで権利といふ語が起つたのである、されば維新前までは我國に
 は権利といふ語はなかつた、無い筈だ我が江戸時代には國民一般に同一の権利といふ

ものを與へてなかつたのである、武士は治者の格で『切捨御免』で、百姓町人は被治者故之に向つて只管御無理御尤もと土下座をしたものである。然し其代り義務といふ語もなかつた、義務の實はあつても消極的の義務のみで、かゝることをしてはならぬと禁制せられたばかり、かゝる事をせねばならぬとはひどく強ひられなかつたのである、所が天地一轉して、維新の新舞臺が開けてから、局面はガラリと變り、四民は同權となつて士も農工商も同じ九腰となつた代りに、古來未曾有の權利が賦與せらるゝことゝなつた、恰も劍に代ふるに權を以てしたのである、従つて未曾有の義務といふものも亦そこに盡さねばならぬことゝなつて來た。

一體法律上の規則を守ればそれが直に道德上の心得である如く解するのが抑も間違ひの根元である、法律は人の内心にまで立入ることをせずして、たゞ表面行爲の上に現はれた所に就いて命令し、禁止するのである、それを法律上で權利を得たからとて徳義などはどうでもよいと一向之を顧みない所より、やたら權利を振り廻して自己の利

益の爲にばかり應用し、能ふだけは他人を排除して自分を利さうとする、そこで多數の人民を苦しめて恬として耻ぢざる貪慾漢や、骨肉で血を洗ふ如き一家の騷動をすら起すやうになつたのである。

又法律上の義務も、其通りで、毫も道德上の義務といふものを顧みない所より、日常の交際上にすら徳義を重んずるといふことを忘れて、自由を勝手氣儘と心得て肩で風を切り、禮義を知人にのみ修すべきものと心得て、群集を排除してわれ一人進まうとする、そこで喧嘩口論、終に毆打創傷すらを敢てするやうになつたのである。

以上は我が國現下の弊風であるが、つまるところ、權利義務の語を狭く法律上のものとのみ誤解して居る所より生ずる陋習である。これはどうしても道德上にも此權利義務といふものが廣く存在するといふことを一般に了解せしめねばならぬ所以である。道德上の權利と云ふは法律で與へたる權利を吾人が常に確守して其銳鋒を外に表はさず、益々『ライト』の意義なる正直に進み行くことである、そして道德上の義務とは法律

で規定した義務を吾人が固く守つて積極的にも消極的にも其務を盡して、益々人としての本務を完うするやうに勉むることである、して見ると法律上の権利義務よりは道徳上の権利義務の方が餘程廣いのであつて、社會的制裁といふことも自然兩者並行の間に行はれることゝなるのである。

特に帝國憲法の發布と共に此權利義務の語は法律上で其意義が確定した、従つて其權限といふものがキチンとさまつた。公權即ち臣民の權利といふものが認められて、居住や移轉の自由、身體の自由や信書の秘密、或は居室の平安、所有權の自由、信教の自由、言論著作の印行、集會の自由、結社の自由等悉く個人としての權利を與へられ又訴訟を爲すの權利を許され、尙ほ參政權といふものも認められて、官吏公吏となるの權、議員となるの權及び之を選擧するの權を與へらるゝに至つた。之と同時に公法上の義務として、兵役納税のとも負擔もせねばならず、其他多くの義務を盡すべきことゝなつた。又私權即ち私法上の人としては生命、自由、名譽等の人體に伴ふた權利を

與へられ、親族間にもそれゝの權利を定められ、財産上、物權、債權、特權などを許されて、人として社會に立つに必要なる權利を悉く與へられた、それと同時に之に對する私法上の義務といふものが、又それゝ守らねばならぬことゝ規定せられたのである。

かく權利義務の權限が廣く大きくなつたこと故、其語の意義が明確となり有力となつたことは當然の結果で、法律上では權利の語を『自己の利益に關して他人を制し得る行為の能力である』と定義し、義務の語を『國家に對し他人に對して國民が爲してならぬ行為と、爲さねばならぬ行為とを國家より強めて命ずるものである』と定義するに至つた。そこで世の輕卒者は權利を認めて、自己の利益ならば他人を推し除けても之を行ひ得る能力と誤解するに至つて、法律上にのみ重きをおいて少しも道徳上の如何を顧みないゝなつた。これが抑々德義を失墮するに至つた大原因である。權利の誤解と共に、義務の方は之を依然舊時の如くに解釋して、現今の解釋を知らぬ振りを

して居る。國家より爲してはならぬと命せられた事は、濫々手出しを仕ないが、國家より爲さねばならぬと命せられたことは、中々一應や二應で諾と畏つて之を盡す者なき其例證である、これが抑々公德といふことを毫も了解せぬ原因といつてよいのであらう。

8 商人魂 (アキナイ、マケナイ)

さて日露戦争でも日清戦争でも、日本人がいつも大勝利を得て居るといふものは一體どこに原因して居るであらうかといふことは、何人も疑問とし且つ研究をし居る所であるが、私の思ふには、これは一言にて盡すことが出来る、何であるかといへば日本人には、いつも踏止りといふものがあつて、露西亞人にも支那人にも勝つたのである、有名なる沙河の大戦、遼陽の攻略、さては旅順の悪戦、黒溝臺の苦戦に際しても、日本人は際どい所で勝つて居る、負けて溜るものか、負けては大耻辱である、日

本軍人の面汚しである、といふ所の『負けじ魂』といふものがあつた故に、悪戦にも苦闘にも一寸も退かぬ、敵に後ろは見せぬといふ古武士の精神即ち踏止りと云ふものがあつた故に、終に見事なる大勝利を得たのである、之に反して露西亞人でも、支那人でも多くは踏止りといふものがない、負けるのはイヤだ位の精神はある、負ければ耻辱位の事は誰でも知つて居らう、然しこゝが愈々踏止りといふ時に臨んで悪戦、苦闘をせねばならぬ場合に、この位奮闘したら、國家に對する義務といふものは済んで居らう、こゝで暗々討死するよりも又盛り返したらよからうといふので、ツイ氣が後へ退る、其後へ退るといふのが抑々踏止りのない證據で、誰も彼も味方の旗色を望んで進退去就に迷ふて居る時しも、さて誰々は退却した、何軍は退いたとなると、ソレツと總軍申合せたやうに潰走をする、これが軍の勝敗の岐る、所であるのである。此に日本軍人の負けじ魂即ち踏止りを、むづかしくいへば武士道ともいひ、或は又日本魂ともいふのであらう。

所が軍人がかく踏止りがあるやうに、日本商人には踏止りがあるかどうか、之は少々疑はしい、どうもチャンの忍耐にはかなはない、西洋人の大仕掛には、とても楯をつくことは出来ない、どうも舶來品に限りますな、和製は實はダメですなと自卑自屈に陥つて『負けて溜るものか、負けては大耻辱である』日本商人の面汚しであるといふものがとんと少い、これが抑々輸入超過、いつも貿易の統計で見ても日本人は負けがちである所以である、これは日本商人諸君に是非共、一奮發を願はねばならぬ所である、

然し外國貿易の事は先づ仕方がない、急な事には行かないとしても、内地の商業に於ても、日本商人には軍人のやうに負けじ魂即ち踏止りが少ない、言換へると商人魂といふものがないのである、勿論ヅルイ考へ、コスイ考へ、ゴマカシの考へ、一寸其場をつくらう考へなどいふ考へは中々に發達して居る、所謂才略縦横といふ點は中々西洋人も舌を捲くほどエライ所はあるが、それ等の才略は昔し封建時代に商人の權

利といふものが低く、義務といふものが少かつた時に自然に養成せられたもので、又其當時には必要であつたに相違ないが、明治昭代以後の四民平等、内外交通の今日にはどうも不向きで餘り多くは必要でない。

然らば日進文明の日本商人としての精神覺悟即ち商人魂といふものは、どういふやうに持つたらばよいかといふ問題に到達するのであるが、私はこゝで少しばかり御説法を始めて見たい。(即ち今日の商人には忍耐、進取、剛毅、正直といふ如き諸徳が必要なのである。)

斯くいへばソンのなむづかしい事はとても實行が出来ぬと早や逃腰になる方々もないではなからうが、私は決して之をそうむづかしいものとは思はぬ。諸君に向つては釋迦に説法かは知らぬが、唯だ『アキナイ』『マケナイ』の二點を發揮して貰へば、それで以上の諸徳は綺麗に見事に成功することが出来るといふのである。

抑々『アキナイ』とは何であるかといへば、何人も承知の如く商賈に飽きない、即ち

忍耐持久の精神を有することである、然し何程忍耐であつても、常に時勢も察せず世人の嗜好も考へなくて、いつも昔し通りにボンヤリして居つては同業者の利巧な者に必ず先を越されて仕舞のみならず、外國人などに必ず得意先を奪はれて仕舞ふやうなことになる、これはどうしてもよく時勢を察し、世人の嗜好といふものを考へて、其時相應に裝飾も改めねばならず、店も廣めねばならず、趣向も代へねばならぬといふやうなもので、常に客を引きつけるといふ點を忘れてはならぬ、こゝが即ち明きのない即ちアキナイであつて、毫も油断せず、間隙を生せしめぬといふのが即ち今日のアキナイの意である、これをむづかしくいへば即ち進取の精神を發揮することである、次に「マケナイ」とは何であるかといふに、我國の商人間には封建時代の習慣として掛直といふものがあつて、客は必ず直切るもの、商人は必ず負けるものとなつて居るが、歐米の商人などは之れを見て大層驚いて居るやうである、何も正札付にして、其直段で買へば實に結構で申分がない、手堅いといふやうになつてこそ、客も満足をし

て直切らなくなるのであるが、ごうも日本商人は習慣上、さういふ手堅い事を嫌ふ風がある、客の方にしても、少々直段は高くても手堅いもので申分のない物を買ふやうにすればよいが、それがどうも「安物買ひの銭失ひ」をする習慣がやつぱり抜けぬ、双方とも五分／＼でこれは極めて悪い習慣ゆへに、一日も早く改良せねばならぬ、即ち日本商人は頑固のやうでも、決して此直段で一厘もまけませんめといふ真正確實の正札付で物品を賣出す域に進まねばならぬ、之が即ち「マケナイ」の眞意である、此マケナイと共に今や日本は文明世界の仲間入りをした、一等國になつた、商人とても同じく今は世界第一等の商人であるといふやうに負けじ魂を發揮して、何でも將來立派な申分なき商人として發達せねばならぬ、殊に支那人の忍耐にはとてもかなはず、歐米人の大掛りには逆も及びも付かぬと自卑自屈して、自ら和製はダメだ舶來品に限りまますなごといつて、いつまでも取次商人の心持で居ては決して大なる商人にも名譽ある商人にも一等國の商人にもなれないのである、これも十分に負けじ魂を發揮

して、我が内地に於て外國品を凌駕するほどの結構な見事な品物を作るやうにし、又進んで支那朝鮮は勿論歐米各國へもズンズン販路を擴張して、日本の商權といふものを世界中に廣めるやうにせねばならぬ。これも即ち「マケナイ」の眞意ではないかかく述べて來ると、文明商人の商人魂を養成するには何もむつかしい事はない。「マケナイ」「マケナイ」の二語を服膺すればよいのである、唯之を文明流に解釋して、消極と積極との二方面より見て、アキナイといふ語は内に忍耐なると共に外に向て進取するといふ事に解し、又「マケナイ」といふ語は内に正直なると共に外に向つて剛毅であると解したならばよいのである、之を要するに商人魂の發揮は今後の日本に大必要である、何となれば如何に軍備の擴張が出來ても國富といふものが増進せねば、邦家は貧弱に陥り全然窮乏を告げねばならぬからである、其國富を増進する直接の任務を有するものは實業家であつて、其實業家中でも今日の商人は手廣く取引をして、唯一家を富ますばかりでなく、どん／＼輸出超過で國富を増進するやうにせねばな

らぬ大責任を有して居るのである、されば今後の商人は一に正直にして信用を博し、二に進取にして得意を増し、三に忍耐にして事業を盛大にし、四に剛毅にして百折屈せず、愈々其商權を擴張し其名譽を高めねばならぬことである。

9 商業道德の必要

近時我國識者間に必要視せらるゝは、商業道德振作の方法である、何故に此問題が起つたかといふと、ツマリ我國の今日は昔日とは異つて、大正の有難い四民同權の大御代であるのみならず、廣く外國とも交際をして、歐米諸國人をも顧客として取引をせねばならぬ時世となつたから、商業上我が邦人が封建時代のやうな偏狹な狡猾な思想を有つて居つてはならぬといふ所より、さてこそ此問題は起つて來ものである。そこで少く其必要を述べやうと思ふのであるが、それに就いて聊か我が國商業の起源を尋ね、又商業の本旨を明かにして見やう、之は萬國何地も同一の理由に基いたも

ので、有無を交換して双方の便利を圖つたものに過ぎない、詳しくいつて見ると、最初は現物と現物との交換であつて、双方共自分の餘計有つ所を出して、足らぬ所を一方より受取つて、其缺を補ふたものであるが、それが漸次便益を感じるにつれて、其取引を擴張し、距離の遠い所でも、交換をするやうになつて、切りに現物交換の不便を感じ始めて貨幣といふものを發明して、品物を賣買する時に用ふる手形とするになつたのである、即ち貨幣が出来て物の價值といふものが定まり、こゝに物價が大凡一定するといふ運びになつたのである、所かそれでも尙ほ遠方との取引は充分便利でないといふ所より、今度は約束といふことを發明して、双方信用を重んじ、一方が前日に代價を支拂へば一方は約束通りの日限に物品を送り届け、或は又一方が約束通りの物品を先方へ送れば、一方が直ぐさま之が代金を届けるといふやうに、こゝに契約をすることが始まり、さてこそ商業は國の遠近、海の内外に拘はらず、廣く取結ぶことが出来るやうになつたものである。

之を我が國の歴史に徴して見ても古代は現物と現物との交換より始まつたもので、大和攝津など帝都に近い所には、必要上自然に市といふものが出来て、互に有無を交換した、所が現物交換は兎角不便利であるといふので、やがて貨幣を考へ、支那に習ふて朝廷に鑄錢司が設けられて、之を鑄造することになつた、これが今日でも残つて居る古錢である、然し中古以後我が國は殆んど戦争で月日を埋められたこと故、従つて商業の途も發達せず、室町時代には貨幣が缺乏して、民間では支那明國の永樂錢などを使用して居つた、それ故に近い所同士には現物交換が依然として行はれたが、遠方の取引は都會の大商人間のみ營まれたものであつた、然る處近世江戸時代となり、大凡三百年間も太平無事の世となつた故に、始めて商業の途が開けて、國內にては漸次發達を爲し、従つて諸種の貨幣も鑄造せられ、町人といふものゝ地位が百姓と相列んで社會に高まることゝなつた。それ故商業家に向つての訓誨といふ如きものも、自然學者間に唱へらるゝことゝなつたのである。

然し我が國の學者は今日でも尙ほ世事に迂い人が多しやうに、江戸時代などには、鬼角世事に關せぬのを學者の自分のやうに心得た、それ故商業道德に關したる訓誨杯は甚だ少い、されど世の實用を重んじて實學を唱へた學者中には、多少此説明を爲して居るが、其説明が誠によく眞理になつて居るのは珍とすべきである。今其一二を擧げて見れば、享保の年即ち八代將軍吉宗公時代に長崎の儒者西川如見といふ人は、町人囊といふ書物を著して町人の心得を示した、其書の中に商業の本旨が説き明してある、「夫れ商のみちとは金銀を以て物の多少好惡をつもりはかりて、用を成し、利徳を得るは皆これ商の類なり、古へは金銀をつかふ事なくて、唯物を以て物に換へたり之を交易ともいへり、すべて物の多少高下を量り損益を考へて高利を取ることなく、有る所の物を以て無き所の物にかへ、我が國の物を持ち行きて人の國の物にかへて、天下の財物を通じ、國家の用を達するを眞の商人とはいふなり」云々、さすが當時の貿易港たる長崎に住まれた人だけあつて、見識が高大で適切で、實に當時の戒となつたと

思はれるばかりでなく、末代までも其眞理を傳へて居る。

又同じく吉宗公時代の元文の年に心學の開祖石田梅巖といふ學者も商人の爲に商業の本旨を説き示して居る、「商人の其始をいへば古へは其餘りあるものを以て其足らざる物にかへて互に通用するを以て本とすとかや、商人は勘定委しくして今日の渡世を致す者なれば一錢輕しといふべきにあらず、之を重ねて富をなすは商人の道なり、富の主は天下の人々なり、主の心も我が心と同じき故に、我が一錢を惜む心を推して賣物に念を入れ、少も魚相にせずして賣渡さば、買人の心も初は金銀惜しと思へども、代物の善きを以て其惜む心自ら止むべし、惜む心を止め、善に化するの外あらんや」と、よく商業の本旨を説き、并せて商人たるの心得を説き示したものでないか。即ち以上の町人囊でも梅巖の教訓でも、皆眼を社會的に下し、廣く財を交換して公共の爲に盡すのが商人の本分といつたもので、此所に氣が附いて常に誠實に商業を營めば、始めて商人たるの資格にかなふことになるのである。

我が江戸時代の商人も如見先生や梅巖先生の教戒を服膺したならば、自然我が國の商業を發達せしめ、従つて商業界の道義を維持することが出来たであらうが、かなしひ哉江戸三百年の太平は我が國民を奢侈遊惰に流れしめ、且つ鎖國保守の政策の下に國民をして頑固偏狹に陥らしめた、それ故に商業は行はれても發達の見込はなく、商界の德義などいふものは、年に月に地を拂ふた、それ故に我が國商人は維新後世界列國の中に立ち交はつて、廣く貿易を營むやうになつたが、積年の惰力容易に以前の陋習を脱すること能はず、たゞ商人は利口に小はしく立廻り、一時の利益をさへ得ればそれでよいと心得、たゞ眼前の小利に迷ふて永久の巨利を博することを目的とするものが少い、嘗て或人から日本商人が外國人の不信用を來した一の珍話を聞いた事がある、それは何であるかといふに、日本商人は兎角何事にも正直でなく、其上心が偏狹である故に常に實際を隠蔽する癖がある、それで或時日本人が外國人と取引をして、大層目立つた程の利益を得た時に、或る外國人が其日本人に向つて懇意づくとして

あなたは大分今度は利益を得られたやうであります、これ程御儲けでありましたと問ふた、其答に日本人は「イエどうして、アレハ利どころではありません、元價が格外高かつた故に收支漸く償ふた位であります」といつた、そこでそれを聞いた西洋人は苦い顔をして話を止め、後日人に語つて日本人は逆も信用をして取引することが出来る國民であると嗟嘆したさうである、何とこれはつまらぬ所で我が國人の陋習を見られたものではないか。

又近時聞いた事があるが或る西洋人が一日東京の某骨董店に立寄り、或品物を買取らんとして代價を聞いた處が、其店主は利益を多額に占めやうと思つて百圓ですと答へた、西洋人は小首をひねり、それは餘り格外な價じや、眞實の處を御いひなさいと、再び問ひ返した處が、店主もこれは大分日本の事情に明るい西洋人であるとして取りそんなら結着五十圓に御負け申しませうといつた、其時西洋人はすかさず、そんならギリ／＼四十圓になさい、それならば買ひませうといつて毫も動かぬ故、店主も終に

我を折つて四十圓に負けて其品物を賣り渡したが、利益はといふに僅かに五圓よりなかつたこの事である、これは實に我が國人が取引に下手故に西洋人に悪い腹を見られた上旨くねぎられたもので、最初より之は六十圓ですと相當の利益を附して答へたならば、固より商人は利益を以て立つもの故、西洋人も成程といつて買取つたに相違ない、こゝが即ち商人の徳義を解せず、商業の本旨を解せぬ所より、とんだ失敗を來さねばならぬ處で、よくよく我が商人の戒めねばならぬ事柄である。

我が日本商人が外國人との取引で失敗をした話は、以上に限らず、澤山に聞いたが兎に角これは誠實、親切といふ心掛が薄い所より、終に信用といふ點に大層缺けることになつて、重ねくの面目、不利益を來すやうになつたものである、此引證として嘗て醫學博士高木兼寛氏が或處で國運進歩の大妨害物といへる演説を爲された中に、我が日本國民の不信用と貧乏と題して述べられた點は、よく明瞭に我が邦人の缺點を表はして居る、其言に。

横濱開港以來、兵庫神戸開港以來、長崎開港以來、商業に従事する人は、屢々詐僞的の事、即ち毫も外國の人に對して信義を重んずるとなく、何時も彼等を瞞着して利を射んとしたる場合が甚だ多かつた事であり、即ち生糸業も之が爲に大に失敗を致し、茶業も之が爲に失敗を致し、今や米國などに日本の茶は殆んど賣れぬと云所まで達して來てあります、岡山の花産製造業におきましても矢張り同一手段に依て外國人を欺かんとして、夫が爲に大に損失を爲し來つたる場合が少からぬのであります、(略)動もすれば外國人と見れば一圓の物を五圓に賣附け、十圓に賣附けんとするは、一般といつて宜しい、實に我が同胞は他人に對し不親切である、此の如きことを致したのが即ち我が國家未だ彼等の信用を得ることが出來ぬ所以であります、(略)我が邦今日の情態なるものは、人の世の中を通るに、嘘で通れる者といふ考を持つて居る人が多い(略)例へば銀行業の如きに致しましても、米國とか英國とかいふ如き所のもにあつては、何等の抵當品なくして何十萬圓の金は立所に

人か貸與す、其貸渡した金は約束を致せば其約束の期日には必ず返済を誤らぬといふことになつて来て、初めて實業なるものが駸々乎として進む譯であります、然るに我が邦に於てはどうかといへば、借る、借るに付きましたは、何れの銀行でも無抵當で貸す銀行はありませぬ、必ず擔保品を持つて行かねばならぬ、さうして其金を拂はぬ時には、即ち其擔保品を賣却して之を償ふことになるのであります、(略)大抵は約束は決行せぬ、それだから二週間や三週間は手間が掛ることになつて居ります、是等は即ち何に依るのであるかといへば、所謂道德の頽廢に原因する外はありませぬ云々。

博士の言は思ひ切つて明白に我が商人の缺點を指摘されてある、これに違ひないのであつて、我商人は其不心得の爲に、外國に向つては自己一人のみならず、實に國家の不信用を來し不面目を重ねて居るのである。そして内に向つては自己不信用の爲に苦み、且社會の經濟を不進の裡に沈めて居るのである、これは何の爲であるかといふに、

つまる所我が邦人が商業の本旨を了解せぬのと、且つは商業上に徳義を重んずべきを忘れて居る故に外ならぬのである、苟くも國の爲を思ひ世の爲を思ひ、併せて自己の爲を思ふ者は、深く戒めて商業道德を嚴守せねばならぬことではないか、

10 功過録

(蓮池大師と正覺院僧正)

すべて善事は之を口にすると易いけれども、之を行ふことは難いもので、之に反して悪事は隠して居るけれども屢々行つて居者である、されば人は成るべく善事を多く積むと同時に悪事を少くするやうに日夜心掛けねばならぬ。然し此心掛とても矢張口にするばかりでは實行し難きものゆへに、古人の道に志ある者は、實踐躬行の手段として、日々の功過を帳簿に記して、己が徳に進む一方法としたのであります。西洋にも此例はある、今は東洋の事實に就て少し御談しを致さう、昔し支那國明の代に袁了凡といふ博學の人があつたが、日常道に志し、一日南雍の棲

霞寺といふ佛刹に雲谷禪師といふ高僧を訪ひ、道德の事を物語りして、同禪師より功過格といふ一冊の書物を授かつた、そこで衰了凡は愈々實踐躬行の切要なることを知つて、それより日々其功過を書記して深く戒め強く勵まし、積年實行の工夫を凝した所が、全く諸願成就するやうになつたから、自陰騰録又は善惡慶歎篇といふ書を作つて功過十一品の格を記すに至つた、其奇特に成つた書を古杭雲棲寺の蓮池大師が更に自知せられたのが、功過自知録といふ書である、爾來支那の人は是等の書によつて平生徳に進むの便とし、爲に善人の數を増したのであるか。我國にても舊幕時代に之を我が國語に譯して、世人の道德を導く書物とするやうになつた。今其善門過門の目を擧ぐれば下の如くである。

善門 (一) 忠孝類 (二) 仁慈類 (三) 三寶功德類 (四) 雜善類

過門 (一) 不忠孝類 (二) 不仁慈類 (三) 三寶罪業類 (四) 雜不善類

委しきは和字功過自知録といふ書に載つて居る、

以上の説話と事異つて、我國にも功過の事を大層苦心して終に一代の高僧となられた人がある、それは江州上菩提院の正覺院僧正であつて、此僧正の功過録は長持に入られて七八荷もあつたといふ事である、一日此僧正の處へ或弟子が參つて、今度大般若經六百卷を書寫して其經卷を表具しやうと思ふのでありますが、若し僧正の袈裟の古いのがあれば頂戴したいと願ふた所が、僧正の答には、袈裟は皆没後の形見分として存命中より人々に與へて居れば、着用して居るものより外には一枚もない、然し是非とも經卷の表具に袈裟が欲しいとならば、正金にて古い袈裟を貰つたらよからう、金ならば施物に受けたのが其菓子箆等の引出しに入れてあるゆへに出して見よとあつた、そこで弟子が引出して見た所が、小判やら一分判やら、古い二朱銀、小玉の類まで澤山にあつた、それを見てサア、それを手持て行つてどうか後の埃を掃除して置いて呉れいと仰せられたゆへ、弟子之は忝なしと、金銀を皆々打ち明け掃除をするに、中より箱のかな物の離れたのやら、又は古釘などが混つて出た、そこで弟子がこれは如何

なされたものと尋ねた所が、僧正の答へに、何となしに其引出しへは金物類を入れることとして置いたゆへに、かく混つて居つたのであらうとあつた。之にて其金銭の事などに恬淡として眞の高僧であつたことが分る。此僧正の功過を擧ぐるに下の如くであつたといふ。

功の部 (一)親をすゝめて善人とならしめ、(二)子を教へて慈悲をなさしめ、(三)家内をむつまじくし、(四)物を拾ひても其主を尋ねて返し(五)老たるをうやまひ、(六)みなし子をあはれみ(七)人の善事をなす事を共に喜び、(八)人のよき事は我がよき事におもひ、(九)人の悪しきを語らず、(十)はづかしめられても恨みず、(十一)恩をかけても禮を受ける事をもとめず、(十二)ものゝ命を取らず、(十三)むしけらもいたはり、(十四)人をそねます、(十五)おのれをたかぶらず、(十六)乞食に施し(十七)人の知らぬ善事を爲し、(十八)善とあれば近づき、(十九)悪とあれば遠ざかり、(二十)よき友にはしたがひ、(二十一)あしき友にはまじはらず(二十二)神

佛をうやまひ、(二十三)人をそしることをつゝしめ、(二十四)仁を施し(二十五)義をまもる等

過の部 (一)両親をかるしめ妻子をしたしみて親はうとんじ、(二)人の難儀をいたはらず、(三)おもては和ぎても胸の中あしく、(四)人をだまして利を求め、(五)われにおとれるを見下し、(六)義にあらざるを行ひ、(七)道理にかなはざるに與みし、(八)おろかなる者をたぶらかし、(九)無慈悲にして心づよく、(十)威勢をもつて弱き者をせめ虐げ、(十一)上をうやまはず、(十二)下をあはれず、(十三)神佛を疎にし、(十四)悪きと知りながら改めず、(十五)おのれが罪を人にきせんとし、(十六)物の命をとり、(十七)蟲の穴をふさぎ、(十八)善事をさまたげ、(十九)悪事を取りもち(二十)人のあやまつを見てかげにて笑ひ(二十一)とがなき人をそしり、そこなひ(二十二)人のなさけを感心せず、(二十三)秤の罪、(二十四)升の罪、(二十五)尺の罪、(二十六)偽物賣る罪、(二十七)非義の財をむさばる等

これ皆人々平生の箴とすべき金句ではないか。

中編 季節と修養

11 歳旦の覺悟 (堪忍御萬歳)

昨日の鬼が福面を被て御慶申しに来る春は兔に角愛嬌ありて目出度ものに相違ない、大阪の俳人にして狂歌師なる油煙齋貞柳の狂歌にも

百人一首ごうありとても元日の

あかつきばかりよきものはなし

ごうくと心節季の蓬生も

あくる朝として民もすぐなる

とある通り此慶賀は古今に變りないものであらう、さては中務卿の物數寄にも、數寄屋を仕つらへ、間の襖には門松、萬歳などの年始の景物を畫かせ、引手を故らに飽の

貝にて作り、袋棚の引手をも丸の文字にさせて獨り興がられたのを、さすがに歌道の達人なる冷泉爲村卿が見て

しめかざり松を引く手ののしあはび

間毎にめでたう候はれける

と洒落れて、ドツと大笑ひの落となつたといふも、此正月に因める爲であらう、恐らく往古來今、少しく文字あるもの、歌よまぬはなからうが、腹の底から笑ひ興じたものがないゆゑに、年々や猿にさせたる猿の面」の依然相變りませぬもののみである、

元日や此心にて世に居たし

元日や其道々の朝けぶり

元日や古きものには顔ばかり

これ等が一寸凝つて大い所であらう、或人が年玉の扇を買つた所が箱のみにて扇がなかつたゆゑに忽ち口吟して

御慶とて二本にあらぬから箱は

これぞまことのおとし玉なり

と洒落れたのも奇抜の一である、又例の大我上人が商賈によする歳旦といふのが面白

そろばんも戸棚にあけて福壽草

みせのあたりを華やかにする

かけとりらに喧嘩をしたるかどくを

あけて御慶をいひまはる也

然し眞實の處、商人は内心こんな呑氣なものではなく、笑をも愛嬌の一に數へて商略上に應用し、一年の作戦計畫を元旦の炬燵の内より講じて居るのである、されば舊幕の町人にも正月二日に十二月晦日と大書し、之を大黒柱の内方に張置きて、一年の戒としたといひ、或は元旦に堪忍箱を床に飾り、家人雇人を集めて之を拜ませ、其箱

の中より金銭を取出して堪忍大明神の御初穂と稱へて之を願ち與へたといふ如き、中々に勉めたものである。其時の狂歌が残つて居る

大どしはつねにこそあれ勉むれば

いつも正月すみよしの松

何事もたゞ堪忍の此箱へ

世々納めたる家ぞ目出たき

又寶船をよみては「初夢の浮世わたりの人はたゞ中のよいのが寶船なり」鏡餅を祝ひては「あしきにはうづらぬぞよき鏡餅、よき事につく家ぞめでたき」とよみ、萬歳をよみては「初春の徳は堪忍御萬歳、愛敬ありて榮えめでたし」げにまこと徳は堪忍御萬歳、愛敬あるこそ目出度かりけれ」と戒め、家人や雇人を鞭撻しては「元日やうしろに近き大晦日」、「元日は大晦日の始なり」、「元日や先づ朝起きを仕初めけり」元日や又うかくの始めなり」などと、お極り文句を繰返しくて苦心經營、以て一年の

計を定めたのである、これを思へば世渡りの心勞は並大抵のことではなく、先づはうかくと暮す浮世といふよりも、憂世の方が妥當であるかも知れぬ、例の宿屋飯盛の狂歌に

年のよる春をめてたいくと

いはふあろかを山も笑ふか

とあるのは、先づは穿つたものでがなあらう。

12 歳首の戒 (一年の計)

凡そ天下の事は何を爲すにも最初の了簡覺悟といふものが大切である如くに、一年の事も元日の覺悟計畫如何にありとは、誰しも百も承知の事であつて、さて實際はといふと殆んど實行し難きが世上の通患である、そこで成らう事なら其悔を少からしめんとて和漢古今の聖人賢者は種々の訓誨を垂れて居られる、

元日や人のして置く計

これは俳人移竹といふ人のよんだ句である、又或書にも此戒が丁寧親切に述べてあつて、下の條項をさへ成して居る。

元日は大晦日のはじめかな

元日や、うしろに近き大晦日

一生の計は幼年にあり、幼年に學ばざれば年老ひて後空し

一年の計は元日にあり、元日になさざれば月立ちて後空し

一月の計は朔日にあり、朔日になさざれば日過ぎて後空し

一日の計は鶏明にあり、けいめいになさざれば時過ぎて後空し

一家の計は和順にあり、和順ならざれば不和になりて後空し

此訓誨の條項を胸に疊んで常に服膺して居れば、人間一生の悔はない筈であるが、此

内の一日の計すら嚴守し難いもので、爲すべき用向を目前に控へながら、ツイ寒い

暑いで大寝坊、眼が覺めて見ると日殆んど天に沖すで、一日まごつきの始め、それが一月二月とうかうかと積累つて、終に一年を空しく過して所謂歳暮嘆を發する仕儀となるのである、獨り事業上の事のみでない經濟上の事に至つても、一家の計を和順に基礎を据えて置かぬ時には、夫は内を外、妻は舅姑を鬼、子女は兩親を學んで碌な品性を修養することはない、終に經濟上にも影響を及ぼして、何時も空櫃の歎聲を發せざるを得ないのであります、それを恐れるならば元日から大晦日の覺悟を定めて、一年の計畫をチャンと立て、悔を歳末に貽さぬようにすればよい。

元日や先づ朝起を仕初めけり

此覺悟は實に立派なもので、之を忍耐持久してよく繼續をすれば、最初の初一念は終に福德長壽を生出す所の源泉となるのである、それを兎角に

元日や又うかくの始なり

で、それ目出度い、酒だ、仕事は明日でよい、それ二日正月、三日正月、終には二十

日まで正月を楯に取つて兜をきめるといふと、一月の末には、事業上經濟上大に損耗を來すことは必定であります、これは深く戒めねばならぬことである、

二つあれば又三つほしきお正月

さて人間の立志といふことはツマル所、此了簡覺悟を最初に定めるとの謂であつて、其志望を堅確に維持して勉めて止まぬ故に、終に其目的を達することが出来るのである、かの有名な加賀の千代が永平寺長老の御前に出で、佛教に所謂「一念三千」の題を出された時、直ぐ筆執つてサラ／＼と料紙に書下したのを見ると

百なりや蔓一すじの心より

とありました。成程一念發起の作用によつては必ず成佛得道することが出来る、然し之を邪路に踏み違へると有想、夢想、種々様々の魔道に陥るのである、かの豊太閣の千生瓢箪も此の一念發起の結果である、韓信が人の股を潜つた時に最早一念は發起した、なさけなき哉世間普通の人は何時もうかくで、終に心機を一轉せしめることが出

來ぬ、それが終に一生の不覺の根源となるのである、それで何時も兎角放心であつては行かぬ、孔孟も深く之を戒められて居る、うかくと何の氣なしに途を行く故にツイ大溝へ眞逆さま、氣を付けて覺悟して居れば随分丈餘の溝も一足飛び、存外容易なものである、事業の成否は全く一念發起にある。了簡覺悟にある。初一念にある、一年にすれば元旦、一月にすれば朔日、一日にすれば鶏鳴、古人はスツカリ遺憾なく教訓を垂れて居られるのを、ツイ覺らずに後悔するのも矢張り不覺不了簡に相違ない。

はかなしや思へば日々別れかな

昨日の今日にまたとあはねば

13 節分の豆撒 (立春大吉)

此頃は二分舊儀式が復興して節分會がなご諸所に行るゝから、少しばかり之が起源を原ねて見やう、追儼の事は古書に散見して居つて今更事新しく言までもないが、

豆を撒といふ一事に至ては、其由來が一定して居ない、或説には豆は魔滅で、惡魔を滅ぼすといふ義に基くといつてあるが、これは一寸面白けれども寧ろ牽強附會であらう、何故なれば豆を撒くといふ故事は、嘗に我國ばかりでなく、追讎の本案本元たる支那にても夙に之を行ふた者で、必ずしも我國の古語にのみ關係を有して居るものでないからである、是等は後世の佛家が金剛力士の疫を逐ふ故事に准じて、豆の邦音を故らに魔滅の文字に當て嵌めたものと思へる、それより俗に壯健なことをマメな男といふやうになり、口マメ、箸マメなど、敏捷なことにもマメが用ひらるゝやうになつた。

○支那の豆撒 果して然らば豆撒の故事は支那にては何に由て起たのかといふに之も數説あつて確かではないが、今其一二を擧ぐれば、俗説としては、漢の代に翼奉といふ者があつて、其子息の爲に、京房といへる女を迎へることとしたが、其結婚の日が三殺の日であるゆへに不吉といふのであつた、三殺とは牛青、烏鷄、青草の三殺神が

人の門戸に立つ日には、新なる人は門内に入るを得ず、若し強ひて犯し入れれば尊長を損し、且つ子女を擧ぐることが出来ぬといつて、所謂當時の迷信を言表はしたものであつた、所が京房はハイカラ男であつたと見え、決してさういふ理窟はない、我に手段ありといつて、結婚の當日婦の門に到らんとする際に、穀と豆と草とを以て之を拂ふた、時に三殺神之が爲に其門を去つた故に、新婦家に入て事なきを得た、爾來嫁娶の時には草を門内に置き、車より降る時に穀豆を撒くに至つたといふ、随分眉に唾の説であるが、こんな鄙俗な事が反て幼稚なる社會の事物起源を爲して居るのは珍らしくない。

○炊豆の効能 又一説は炊豆は時氣を拂ふもの故に、新しき布の中へ大豆一斗を盛り、之を井中に置いて一夜明けて取出し、炊豆として七粒宛を食へば甚だ佳しといふ本草説に基づいて居る、これはブーツを開けた經驗説といつてよい。

兎に角以上の俗説などより、追讎の式に豆を撒くやうになつたものと見え、後には年

男さへ出来て支那の民間に豆撒の事が始まつて、我國の民間にも之を摹して追儼を行ふに至つたものであらう。

○節分の大豆 かの行譽師の壺囊抄の中にも此故事を穿鑿して、節分の夜、大豆打つ事は宇多天皇より始まり、鞍馬の奥僧正谷御菩薩ケ池の端 方丈の穴に住みける濫婆惣主といふ二頭の鬼神共に出で、都へ亂れ入らんとしけるを、毘沙門の御示現に依て彼の寺の別當奏し申す仔細あり、主上聞召し、明法道に宣旨ありて、七人の博士を集めて、七七四十九家の物を取て、方丈の穴を封じ塞いで、三石三斗の大豆を熬りて鬼の目を打たば、十六の眼を打盲して、抱へて歸るべし云々とあるのは、如何にも御念の入つた附會説である。

○迷信の惰力 然し兎に角かゝる兒戯に類した儀式が文明の今日にも尙ほ残つて、成田、淺草の繁昌を致して居るのは、如何にも不可思議の現象であるが、之ぞ所謂迷信の習慣的惰力とでもいふのであらう。そこで此迷信を攘ふ爲に一首狂歌

まめでゐて心の鬼を拂ふなら

いつも立春大吉の人

○十返舎の狂歌 之に就て思ひ出さるゝはかの滑稽家の隊長十返舎一九が嘗て鹿島香取へ参詣の途次、松岸の市野屋といへる茶亭に憩らひ、人より望まれて書と歌とを節分の豆撒に就いてよんだことがある。

節分の鬼にかはりてよめる歌

わたくしが天の邪鬼ならごうなさる

さてもしつこいおにはそとく

これは實に人生の慾張りを穿つたものである。

14 彼岸詣 (心身の保全)

彼岸詣といへば、今では老爺老媪の慰み仕事のやうに見做されて居るが、古人創設

の眞意を酌んで見ると又中々に棄つべからざる節がある、それを一寸ハイカラ式に列べて見ると(一)遠足を奨励して健歩に慣れしむること(二)眼界を新にして心機を一轉せしむること(三)目的地を定めて散漫放縦に流れしめざること(四)信仰心を促がして正路に入らしむること、などの功能がある

蓋し節三冬に入つて後の所謂冬籠りといふは、吾人の身體をして激烈なる寒氣に觸れしめずして、之を外護すると共に、室内にありて精神的滋味を取つて、心神を保養せしめん爲である、湯島の麥天が「唐大和好けばあつまる冬籠」との警句を吐いたのが如何にも、よく其状を寫したもので、吾人はかくて心身を保全せねばならぬのである所が季節が一轉化して春分の交となれば、中々に一室内に安座し切れるものでない、即ち「ゾロ／＼と蟲も襟で花見かな」

の陽氣となるのであつて、此時を利用して吾人の一時鬱屈したる心身を暢達せしむるといふことは、如何にも衛生上必要なことである、彼岸詣の創意は實に此發願に基

くを疑ひはない

東京では彼岸詣の場所として、市内の六阿彌陀と市外の六阿彌陀とを分つて居るが、之は老幼男女の健歩の度合を考へたものである、地方に至れば必ず附近の名勝地を選んで參詣せしめることになつて居る、特に繁華熱鬧且は紅塵萬丈なる巷に住む市民をして、眼界廣潤にして且つ風景に富む山野を逍遙せしむるといふことは、今日倫敦紐育邊の學者が主張して居る如く、實に心身の攝養上切要なることに相違ない、所で彼岸詣といへば實は保養の爲であつても、名は苟くも一種の信仰を以て吾人を出遊せしめるのであるから、そこは幾分か心裡に健全なる分子を含ませしめて居る、而して目的地が定まつて居つて、一日を程よく清閑の中に送らしむるのであるから、放縦散漫を容す餘地がない、此等の點は實に面白い趣向と思はれるのである。

一體彼岸といふことは、晝夜平分の交といふ意に出たもので、日出日没の兩岸を比するに左右均等といふ所より比岸とも書し、或は彼の岸と此の岸とが齊しいといふ所よ

り彼岸と書すとも傳へて居が、兎に角之は物の偏倚せざる中正を得たことを賞讃した譬喩で、佛教では之を以て佛法顯現の相應時としたものである、之を六づかしく「生死の此岸より涅槃の彼岸に到らしむ」なごいふのは、畢竟此佛法相應の時を利用して佛恵に引入する説法をやつた者に外ならぬのである、さすれば彼岸詣の如きは、名は既に舊臭い観はあるけれども、其實を復興して、吾人の心身を暢達せしむる一聖日とするのは、今日に於て甚だ適當したる擧と思はるゝのである、かの蜀山が彼岸の日の日、山谷の八百善で「庖丁も八百善根やつくすらん、さんやの堀のかの岸に入る」とよんだ杯は寧ろ食道樂に偏して居るが、兎に角彼岸を以て善根修行の聖日と認めたのは頗る吾人の意を得たものである。

15 雛祭の教訓 (舊慣の善用)

須磨の御祓 三月の節句には、古來雛段を作り、多くの雛人形を飾り立てるが、誠

に綺麗で高尚で昔床しう思はれる、之は抑々何の爲に起つたものであらうか、昔し平安朝時代の才媛と呼ばれたる紫式部の著した源氏物語に「須磨の御祓」といふことが書いてある。其大要は、源氏の君が須磨の浦に流されたまふた時、三月の己の日に陰陽師を召し、悪事災難の穢させられた所が、舟に多くの人形を乗せて之を海邊へ流しそれにて凶事を除いたと載せてある、これはつまり悪しき事を人形に負はせて川へ流せば、其人の凶事がスツカリ除かれるといふ意に出たもので、且つ三月の己に當るのは除日といつて、災を攘ふ吉日と古來定められて居つたからである。

這子と母子 我國の上古には此穢の爲にする人形をアマカツといひ、這ふ子の様につて、萬づの凶事を其アマカツに負はせて、孩兒三歳に至るまでの穢としたものである、それゆへに其人形を一名這子ともいつた、然るに其這ふ子に衣服を着せて弄ぶやうになり、十歳までの幼兒が三月の樂みとし、十歳以上の者は之を忌み嫌ふたが、其後又々這ふ子を母と呼び代へるやうになり、其母子の人形で母と子との身を撫せて、

水の邊で之を解き除ひ、それで母子の無事を祈るやうになつた。ツマリ母はお産の輕いやう孩兒は無事に育つやうにどのまじないをしたものである、支那の故事 此母子の解除は支那より傳はつたものともいふ、それは漢の代の末に、郭虞といふ人があつて、三人の娘を有つて居つたが、三月の上の巳の日に三人の娘が同じやうに御産をして皆難産で死んで仕舞つた、そこで近隣の娘子供が毎年三月の己の日を忌み憚つて、自分の家に居らず皆川の畔へ出て、流れに臨んで萩をするやうになつたと傳へてある、想ふに或はこんな凶事があつて故事となつたかも知れぬが、兎に角三月の暖い陽氣のよい日に、廣漠とした空氣のよい山の邊や川の畔へ出て、冬季に鬱結した精神の保養をするといふことは、衛生上よりいつても至極適當なことで、此等の理由から自然かゝる故事も出たのであらう。

内裏雛と教訓 所が此三月の萩が終に一轉して家庭内の一種の娛樂的儀式となり、這ふ子の様を鳥に準へて雛といひ、徳川氏の時代より内裏雛をさへ作り、之を壇上に飾

つて樂むやうになり、技術も年々に進歩したのである、思ふにかく朝廷の御儀式を模して貴き御姿を拜し、始終内裏の神々しき有様を、子女の時より腦裡に染み込ませたといふことは、誠に我が國體の貴きことを忘れぬやうにさせた好き考案であると思はれる。特に内裏雛の夫婦一對が最も行儀正しく其伉儷を契つたといふことは、大に道徳上の教訓にもなつた。

神代より紙雛二人、三人見す

紙雛の契りも深し、もたれ合ひ

これは實に夫婦互に貞操にして、且つ相扶翼する状を言ひ現はしたものである。草の餅 尚ほ附け加へて置きたいのは草餅のことである、三月の節句には必ず草餅を供へる、之は御存知の通り、糯米や硬米に艾草を混ぜて春くのであつて、三月三日である所より其餅を三角形に切て菱餅といひ、雛に供へるが、之は畢竟儀式と衛生の上より起つたものであらう。即ち雛の始は母子に出で、艾草は我國にて母子草といつた

所より、春の初に萌へ立ち生々の氣ある此草を摘み取つて餅に交へたものである、文徳實録の中に「野に草あり、俗、母子草と名づく二月始めて生ず、莖葉白くして脆し、三月三日に婦女之を採て蒸し、擣きて以て餅とす」と載せてあるのを見ると、草餅を三月の節句に作ることは、文徳天皇以前に起つたものであつて、餘程舊いのである、又昔の醫書ともいふべき本草の中に「鼠麴は中を調へ洩を止め、痰を除き、時期を壓し、熱嗽を去る、米の粉に雜へ食すれば、甜く美し」と記してあるが、此鼠麴が即ち母子草、俗に艾のことであつて、支那にても周の幽王の時に艾餅を作り始めたといふ、此草の汁を取て蜜と合せ、之を米の粉に離へて餅に製し、龍舌絆と名づけたといふ。舊い由來も亦一際床しい趣のあるもので、特に道德上の教訓の伴つて居る儀式は、尙更結構である。されば舊慣といへども之を善用したならば決して差支はあるまい。

16 櫻狩

(慈悲同情と名節)

花見といへば何だか俗に聞え、櫻狩といへば妙に風雅に聞える、これは何故ぞといふに、ツマリ櫻といふ優しき花の姿に、狩といふ凛々しい武装を結び付けて、之を聯想せしめるからである、言ひ換へれば文武兼資といふことが我が武士道の本領で、情けを知らぬ武士は眞の武士にあらず、さればといつて腰拔生クラの武士は固より男子と稱するに足らぬ、そこで文武は必ず兼資せねばならぬと、常に教訓したからである、今日の時勢にていへば、如何に學問技藝に達したとて精神の之に伴はぬ者は、未だ稱するに足らず、如何に權勢富貴を高めたとて品性道德の之に伴はぬ者は、固より尊敬の價値を有せぬといへる教訓に外ならぬのである、殊に世に上中流者と仰がれ紳士紳商と尊ばるゝ者は、常に慈悲同情の念を有せねばならぬ、古人の所謂情け、思ひやり、むづかしくいへば怨の道を實行せねばならぬ、即ち櫻狩の如きは、此春陽出遊の機を利用して、所謂上中流者に慈悲同情の道念を養成せしめたものである。

之に就いて紹介すべき逸話は會津中將松平容敬の櫻狩の歌の由來である、某年の事と

なん、中將出遊して花を領國瀧澤村に賞するや、將に發せんとして俄雨に會ふた、そこで近侍の士其行を停めんとし、之を言上に及んだ所が、中將肯んせずして曰く、今や扈從の士既に其装成り、何れも一日の清遊を欲して居る、然るに雨を恐れて若し此の行を中止したならば、予は信を家臣に失ふのみならず、且は武將たる者の大に恥づべき行を敢てする者であると、遂に雨を冒して主從、花を石部の古跡に賞した、時しも春雨霏々として狩衣を濡らしたのを、會津中將は莞爾として打見やり、侍臣を顧み左の一首を口吟した

よしや身はぬるとも花の春雨に

耕す民のなべてうるほふ

侍臣乃ち之を扈從の士に傳へた所、一行悉く其仁徳の至大なるに感泣し、而して之を傳聞せる領下の民は、何れも其慈悲深き國君の徳に心からなる感謝の涙雨をうるほしたといふことである、何と優にやさしき櫻狩ではないか、

徳川昇平の間の賢諸侯中には往々之に類似した美談がある、又當時の武士中には、情の爲めに涙脆い赴々たる武夫が多かつた、これが即ち眞の武門武士である、又實に日本魂を備へたる日本男子である、かの本居翁の「敷島の大和心を人間は朝日に匂ふ山櫻花」、頼山陽の、「花より明くる三芳野の、春の曙見渡せば、もろこし人も、高麗人も、大和心になりぬべし」との詠の如きは、何れも日本男子の持つべき大和心を説明したものに外ならぬのである、今日の上中流者殊には紳士紳商と人に重んぜられ、又自らも許す人々は、實に此大和心を有たねばならぬのである、櫻に就いて想起せらるゝは、實に其散り際の潔いことである、之は武士の忠義、婦人の貞操と趣を同うして居るといふ所より、古人は實に櫻花を理想とした、或は堅實の資を缺くといふかも知れぬが、それは別問題で此に論すべき限りではない、水戸烈公の國風の如きは、よく此趣を示して好教訓を後世に垂れて居る、小櫻威の兜に記して、

今日もまた櫻かざして武士の

散るとも名をば残さざらめや

又阿部伊勢守へ寄せて

なきがけて散なんものは武士の

道にはほへる花にぞありける

花は櫻木、人は武士、人はどこまでも名節を重んぜねばならぬことである

17 初鯉 (家道の戒め)

「目に青葉山ほととぎす初鯉」、江戸名物の隨一に數へられた初鯉は、今日でこそ左まで珍重するものもないが、明和天明の交には、武家繁榮の頃ひととて、其かつをの名を縁起に擔いて悉く賞味し、我一と先きを争ふた結果が、一尾の價二兩二歩にも上ばつたと舊記に残つて居る、御幣を擔いだ原因は天文六年夏、北條氏綱小田原の浦邊に舟遊せし時魚躍て船に入る、即ち勝負にかつをど喜んだが、果して同年七月十五日上杉朝

定と戦て利あり、これよ 諸士戦場の門出に専ら鯉を食へりと北條五代記にも載つて居るし、太田蜀山の鯉魚の賛にも引いてある、兒戯に類した嫌はあるが、世の流行は大抵こんな事が原因となつて居る、そこで蜀山は例の輕口
かまくらの海より出し初鯉

みな武藏野のハラにこそ入れ

さて初鯉に就いて少しく社會觀を試みんと欲するは、世態人情といふものゝ、何時も同じ事を繰返して榮枯盛衰をして居ることである、川柳點に有名なる伊勢屋の狂句

初鯉、伊勢屋の前をすぐ通り

二代目の伊勢屋呼び込む初鯉

賣居をからやうで書く三代目

これは初鯉の極珍重せられた頃ひ、勤儉にして一代に産を起した本郷五丁目の麴問屋伊勢屋彦四郎の丁稚吉松が、伊勢屋吉兵衛となつて後も、其近江より出でたる昔を忘

れず、一本二兩二歩の初鯉に手を出さぬは勿論の事、吉兵衛の後江戸市中五十三軒と殖えた伊勢屋も、初代は何れも儉約であつたことを諷したものであるが、二代目は親の苦勞を知らずして、即ち江戸ツ子の珍重する初鯉も食ひたくなる、そこは近所の手前、身代の手前さうケチにも出来ないといふ所謂間違つた手前感より、ツイ肴屋を呼び込んだのが、抑々一家破滅の基で、三代目には愈々ハイカツて當時流行の漢字で憂てや、賣居の札を門戸に貼らねばならぬ破目となつたのである。

そこで吾人の言を費さねばならぬのは、所謂間違つた手前感を増長せぬやうに慎まねばならぬことである。これも一代に産を起した木薬屋仁助が其子仁三郎を教戒した言葉に「世間の人が我等を成り上り者といふのを、悪口と思ふのが抑々汝の不覺である寧ろ之は當然の事ゆゑに、自分は昔を忘れず、又之を世間に知らさん爲に、故と「昔はあさましく暮したが、今日にては五萬兩の金持になりたり」と書付て置きたいと思つて居る、これぞ町人の手柄といふもので豪も恥づべことではない、反つて昔は川邊

左大臣魚名の裔とか俵藤太の總領筋とか名乗つた所で、零落をして居れば己れが先祖をいふほど、其人の耻ではないか、然れば世間より成上り者と呼ぶるのは實に我家の名譽である」云々とあるが、これこそ實に大悟徹底した旨言である、言ひ換へれば世に成金と呼ぶる、ほど名譽はないのであるを、之を辨解するは疎かの事、大抵は之を蔽ひ隠さん爲に進んで奢侈費澤に耽る如きは、實に身の程を辨へざる振舞といはねばならぬのであつて所謂二代目、三代目の伊勢屋の轍を踏む者に相違ないのである。併し榮枯盛衰は糾へる繩の如しと古人も言つた如くに、何時々々までも太陽は一所に停在して居るものではない、即ち影あつてこそ光の有難い事をも辨知し得るのであるから、天運の循環は之れを致方なしとあきらめ、泰然として己が業務を樂み、唯だ勤勉にして其家道を守るのが即ち人たる本分である、そこで貧しきは財寶を得んと欲して日々勉め勵み、富みたる者も、亦其財寶を失はざらん爲に終始勤勉を忘れぬならば世は上下貴賤とも推並べて光明ある希望に満たされ、而して世人相互の張合もあり、

且は天下の財寶をして程よく萬民に分配せしめて、下に怨嗟の聲なきを得るのである、この邊の消息は世人が平生の覺悟として、須らく了知して置かねばならぬ事であらう、古歌にある通り

櫻散る隣にいとふ春風は

花なき宿ぞうれしかりける

これぞ即ち世に持ちつ、持たれつする人世の状態を説示したものに外ならぬのである

18 五月鯉 (江戸ツ子の本領)

毎年五月になつて面白くも感じ、又可笑しくも思はるゝのは、八百八町の昔より東都の春の空に高く翻へる鯉幟である。此風俗は餘り舊い事でもないやうであるが、如何にもよく世態人情の幾微を示し、并せて江戸ツ子の本領を發揮して居る。

江戸ツ子は五月の鯉の吹流し

口先ばかり臆はなし

之は人口に膾炙して、誰知らぬ者なき皮肉の狂歌であるが、決して悪口の意味のみではない。鯉脊肌(いせせ)の兄は、口先こそツツケンドンで無愛相であるが、さすが日本一の大江戸に育つただけに大腹中で、腹に蟠りといふものがない、恰も大空に翻つて大きな尾をピン／＼させて居る如くに、實に威勢のよいものである、この暗示である、語を換へて言へば心は清廉潔白で、最も邪智奸佞を惡み、行は勇氣に充滿ちて、實に卑怯を賤しとするこの表現である、これは恐らく、民間の武士道とも謂ふべき男伊達の思想の、此些末なる一事によつて現れたものであらう。所が此風俗好尚が、日本の首府たる東京市と移り變つてより、吾人は遺憾ながら、かゝる善意の解釋を與ふる餘地がないやうに、心淋しく感ぜらるゝのである、鯉幟は舊によつて依然として門戸に懸つて居る、大空に翻つて居る、實に威勢よき姿を示して居る、然るに鯉脊な兄は口先許りは舊の如くにツツケンドンであるが、腹の中には或は慾張りの塊やシミツタレの根

性を藏するやうに成つて居りはしないか、今は日本一どころでなく實に世界屈指の大都會として東京は發達しつゝあるのであるが、其都會の人情風俗は如何、否な我が東京ツ子の大腹中は、今日如何ほどまでに宏量寛容にして、其行ふ所や如何ほど清廉潔白、義理を重んじ勇氣に充ちて居るのであるか、吾人はどうも之を發見するに苦んで居るのである、若し忌憚なく言へば、今や人情功利輕薄に流れて、節義耻廉を重んずる氣風の如きは、蕩然として地を拂ひ、口先ばかり英雄豪傑偉人傑士のやうで、又其風采も一寸威風堂々で、ハイカラあり鬢カラあり八字髯あり白髮三千丈あり、絹帽あり、フロックコートありと雖も、足元は實に劍呑至極で、其止め途さへなしといふのが、實に今日の狀態ではありはせぬか、而して勇氣内に充ちて、忍耐の氣象に富み、どこくまでも堅志力行的にして公私の事業に携はり、能く大成功を來さうといふ氣力氣骨は今や漸く減耗し消磨し去つて、唯だ眼前の榮華を逐ひ、目前の小利に走り、小策を弄し、小智を用ひ、擠排これ事とし、僥倖これ希ひ、苟且儉安以て其日を送り

毫も大都會の面目も思はず、又戰勝國民の名譽をも顧みないといふのが、或は今日の現狀ではありはせぬか。

五月の鯉の吹流しは、今や善意ならぬ解釋が、市民の精神狀態を表明して居るやうに感ぜらるゝのは、吾人の頗る遺憾に堪へない所である、然れども、これは恐らく吾人の杞憂であらう、東京市民は必ずや、今尚ほ依然として江戸ツ子の魂を承け繼いで居るに相違ない、又其心も清廉潔白にして寛容に、其行も勇氣に満ちて敢爲に富んで居るべき筈である、然れば此際此時、少しばかり大戰後の打撃を受けたとて、周章狼狽する如きことなく、泰然として世に處し事を行ひ、且、少しく日常の生活難を來したとて、之が爲め直に江戸氣質を打棄て、贅六氣質に移ることなく、何處々々までも從來の面目態度を保持して、其古來傳承の氣力精神を事々物々の上に發揮して貰ひたいものである。

19 五月雨と田植 (時雨と勤勞)

五月の降雨即ちサミダレは、東洋特に日本及び支那江湖浙閩邊の特産物で、古來此地方に住へる者の、之に就て小言を列べぬはない、司馬温公は「黄梅時節家々雨」又「衣濕黄梅雨裏行」とこぼし、蘇東坡も「三旬既過黄梅雨」と退屈を忍びかねて居る、そこで支那人は梅の熟するに因みて此雨を梅雨と稱し、或は又物の微る所より微雨と書さ、日本人は萬物の熟して潰ゆる時であるゆへツユであると附會し、或は春より升つた陽氣が五月の陰氣で雨となつて降る、即ち露であると稱へ、終には墜栗花の俗説をさへ生じた、けれども物事は悲觀をすれば際限がない、そこで翻然として宇宙の廣大なる所より大觀し達觀して、さて造化の攝理なごいふ點に考を及ぼして來ると、何時しか樂觀に早變りをするのである、早い話がつゆの雨はゴシトヤカにして静かなものはない、讀書講學には持て來いである、若し夫れ雨を衝いて掘切申舟乃至蒲田に菫

蒲の艶美を賞すれば又と言はれぬ風情がある、尙ほ一步を進めて、此の雨あればこそ耕耨に宜しく、出來秋の豊年を祝し得るのも全く此賜であると思ふ時には、之ぞ時雨で甘雨で、天の大なる惠の露とも解することが出來やう、されば梅雨期とて必ずしも吾人のへこたるべき限りではない、然しながら人間の左右し得ざる天候風雨は免る可らずとしても、之に人工を施して其災害を小ならしめ、能ふべくは之を利用して禍を變じて福となすといふ考が人間にはなくてはならぬ、厭世と樂天とは全く此發足點より筋途を異にするのであつて、恰も梅雨を霖雨とこぼすのも、時雨と喜ぶのも、こゝに其理を存するのである、俳人鬼貫がさつき雨たい降るものと覺えけり

とよんだのは脱俗超凡の趣がある

そで先づ樂觀して見ると、此五月雨あればこそ、日本人の常食なる米の飯が出来るのであつて、此の雨を厭はないで働く農家の辛苦をも思ひ遣らねばならぬ、

抑々田植の起源は我國にては言ふまでもなく神代の昔に發したもので、天照皇太神が水田、陸田の穀種を分ちて播種を試みられたに起因し、其地は即ち丹波であつて、所謂田庭の稱ある所以と傳へられて居る、そして五穀の蕃殖するは皆我が祖神の恩惠であるといふ所より、古來田畠に因縁深き神々を祭つたのである、之は鴻恩を謝すると同時に來る秋の豊饒を祈つたものである、其神々の御名を掲げて見るならば

一土御祖神 埴安 媛命又埴山 姫命とも申し

神代卷に伊弉諾尊、伊弉册尊、土神埴安神を生みたまふて萬物生ず云々

一五穀祖神 倉稻魂命

伊弉諾尊、飢えたたまふ時、生る兒を倉稻魂といふ、山城紀伊郡に鎮坐します稲荷大明神是なり

農業祖神 天照大神

粟、稗、麥、豆を陸田種子とし、

稻を以て水田種子としたまひ、農業の事を創めた

まふ

一五穀護神、大己貴神、少彦名命。大己貴神、少彦名命と力を戮せ、心を一にして天下を経營し、又萬民及び畜産の爲に、病を療すの方を定め、鳥獸昆虫の災を攘はんために、禁厭の法を定めたまふ

以上の五神を田の神として祭つた者で、當日は一郷の老者を集めて郷飲酒禮といつて祝宴をも開いたものであつた、堀川院初度の百首の内に

見渡せば小田のなはしろしめはへて
たねまくほどになりけるかな
谷水をせくみな口のいぐし立て
いほしろ小田にたねまきてける

所謂七五三繩を張り、いぐし立などをして神事を修したものであつた

かゝる莊嚴の儀式の裡に田植始めを行ふたものゆゑに、かの苗代に生ふる早苗をも玉

苗なへなど美稱びしょうし、我國わがくにの美風びふうなる男をとこは力作りよくきくし女をんなは播種はんしゆを助たすけた、其苗そのなへう植うる女子ぢよしを早さ乙女おとめと呼よび、之これが苦勞くろうを謝しゃして、公卿こうけい貴紳きしんも種々しゆくの和歌わかをよまれたのである、顯輔あきすけ卿きやうの歌うた合せに玉苗たまなへをよんで

小山田をやまだにいまぞ玉苗たまなへうゑてける

乙女おとめが裳らすそぬれてかへりぬ

又國またくに冬卿ふゆきやうの歌うたにも

里さととほき山田やまだの早苗さなへかへるさを

いそがでとるやいそぐなるらん

とある如ごときは、其心そのこころ忙いそしき苦勞くろう多おほきを思おもひ遣やつたものである、特に柳亭りうてい種彦たねひこが田植たうえ歌うたのはしに早乙女さおとめを詠えいじたる抒情詩せふじやうしは、最もつともよく辛苦しんくの状じやうを描うつし得えて居ある

雨降あめふらねども日ひでり笠がさ、雨あめふる時はときはひぢ笠がさや、かつぐ袖笠そでがさいとせはし、世よわたる業わざ

とすげの笠がさ、すそは田水たみづにおりひたり、ぬれにぞぬるゝばかりなる。

かゝる辛苦しんくをも我國わがくにの貞操ていさうなる女子ぢよしは、少すこしも厭いとはずして夫をとこと共に田圃でんぼに出いで、力作りきさ勤勉きんべんしたものである。否いなな今日こんにちといへども實行じつかうしつゝあるのである、之これを思おもへば都會たうかい富貴ふうきの家の婦女子めぢよしなどは、決して衣服いふくや裝飾品さうじやくひんにのみ煩悶はんもんすべからざることである

田植たうえ歌うたの古雅こがなるものとして傳つたふる中なかに

丹波たんばの國風こくふう

早苗さなへもあくても、しげるくら田たにさかえて、秋あきのみよりは、穂ほに穂ほなびきて心こころのま

ゝに、をさめて、つくもかさねて、一粒りゅうや萬倍ばんばい、二粒にりゅうや萬倍ばんばい

などゝあるのは、如何いかにも天照大神あまてらすおほみかみが垂穂たらしほ八握やつかと喜よろこばれた神事じんじを、其そのまゝに鄙歌ひなうたによ

んで田家でんかの心遣こころやりとした、人生自然じんせいしぜんの趣おもむきが看取かんしゆせらるゝではいなか

20 富士詣 (孝道の奨励)

方かた今流行こんりゆうかうを極きはめて居ある富士登山ふじとざんといふことは、從來じゆらい富士詣ふじまうでといつて先人せんじんの夙つとに實じつ

行して居る所であるが、さすがに古人は富士に對する一種の信仰より、此秀麗無比なる山靈に參詣するといふのであるから、頗る規律正しく又無作法に陥らなかつたものである。

富士詣は今の舊曆六月朔日より二十日に至るまでの間を限つて登山をしたものであるが、其參詣人を稱して行人或は道者といつた、これは今日の語を以ていへば「旅行をする人」「道を行く人」と單に解釋するばかりではない、實は宗教上の儀式習慣として「難行苦行をする所の行人」又は「人道を踏み行く所の道者」といふ道德的の意味をも含蓄して居るのである。

此富士詣も金峰葛城の嶮を開いた役行者によつて創められたと傳へて居る、元亨釋書えんげうしやくの役小角傳には、配流された伊豆の大島より夜々海を渡つて飛鳥の如く富士詣をしたと記されて居るが、兎に角小角は神變不可思議の行者なりとして當時の人に推重せられ又道德堅固の實行者として尊敬せられたといふのは、今尙關西にて流行する大峰入り

いふのも、親に孝行をせよといふことを主として説き教ふる爲めに、劍峰より深谷をのぞかせて道者を誓はせるのである、其孝道の鼓吹が今尙は金峰葛城の道者間に其名残を留め、依然として一種の社會教育を擔任して居るのであるが、富士詣とても此衣鉢を承け継いだものに相違ない、さればこそ富士詣といふことを富士山上といつたが、後には略して山上といひ、轉訛して禪定といふことになつた、即ち富士の神靈に詣づるといふことを悟道に入る途なりとし、又後世菩提を祈る爲なりといふに至つたのである、之は全く佛教の感化に基くものなるを疑はない。

さて此處で少しく紹介したいのは富士詣に關する近世の道德談である、これ亦役小角の故智を學んで、社會多數の無智者を教化したもので、不二孝中と稱して一種の團體を組み、毎年富士參詣をしたことである、玉海、丹徼郷の不二孝報恩編に

一日夜朝暮に怠らず富士淺間大菩薩を頼み奉り、年ごと六月朔日より七月晦日迄の内に、同志をすゝめて、我先にと登山いたし、信心三昧につとめけるにや、今は無病息

災にて家業も榮へ、子供も多く、奴婢をもつかひ、不自由なしに暮すは全く大菩薩の御かげぞと彌々信心増上して他人までをも勧誘せんと思ふなり」とあるのが、即ち其不二孝中組織の大願を發したる動機である。今其の信仰箇條ともいふべき要を録して見れば、左の如くである

不二孝第一の覺悟と申すは信者道源功德の母と申すを本據として、信心より外なかるべし」其信心を起すと申すは、先づ父母に孝を盡すが根本なれば不二孝と名付けたり不二富士異字同體なり、孝あれば富める士となり、不孝なれば貧き男となるぞと申す事也」此不二孝が即ち行者の得たまふ無師智なり、孝よりおし弘めて、君臣は義をばげみ、夫婦は別を重んじ、兄弟は序を主とし、朋友は信を専らにつとむれば金銀衣服は勿論、安富尊榮を得ること、俯して芥を拾ふが如くなれば、こゝを即ち登山の初發心地といふ也」即ち木花開耶姫命の生ませたまふ天孫の御胤の末の我等ぞと決定して登山するを信心の極意とおもふべし、「公儀の御法度は勿論聊かも上たる人に無禮

なく、貧窮者をあはれみ、老若をいたはり、自他宗の争論をやめ、神佛を敬まひ旅人などの難儀を助け、道路あしくは作り直し、橋など落ちばかけ直し、博奕諸勝負をやめ酒宴遊興に耽らず、士農工商各自に家業をつとむるが不二孝の血脈なり」云々とあるは、よく通俗的に日常道德の實踐法を富士の信仰より説き進んだものではないか、畢竟此信仰の對象を富士山とし、其山神なる淺間大菩薩を尊信することによつて、其の罪障も消滅し、自然清淨無垢なること富士の白雪の潔きが如く、内外清淨にして、長久安樂の妙果を得と決定して、唯一心に富士淺間大菩薩にすがりて他力の慈悲に浴せしめんと勧めたのは、亦一種の善巧方便と稱すべきである。

21 午 睡

(和漢の逸話)

炎 熱焼くが如き孟夏の日中には、心身共に疲れ倦みて覺えずも横になる、況んや午餐終つて後の満腹には、所謂目の皮がたるんで駒々たる鼻息自ら曲を成すのである

曩昔孔夫子の門下生宰予は午睡をして其師孔子に叱られたけれども終に十哲の一人に數へられ、之に反して臥を惡んだ有若は終に十哲の科に入らなかつたといふので、勝手な理窟が勝を占めて、學者仲間では夏日の午睡は除外例となつたやうである、それかあらぬか、睡を嗜む先生には、邊孝光、杜牧、韓昌黎、夏侯隱、陳搏、王荊公、李巖老、以下の面々其數枚擧に暇なしであつて、就中李巖老先生の如きは、衆と會食すれば食し罷つて必ず睡るといふのが得意で、衆人が棋を圍んで居る側で、グウ／＼駢をかきやがて寢返りを打つて、自分はこれ一局を終つたが諸君は幾局を終りたまふた杯といつて、又グウ／＼一寢入やつたといふことである、又宋の華元郡の王允良といふ人は、其性晝寢を好んで毎旦酒を被りて午睡を始め、暮に漸く目覺めて手水をつかひ、それより衣冠を正して燭を燈し、事を執り了つて後、又もや飲食宴樂して旦に達したといふことであるが、これは一段と甚だしい午睡癖である

さて午睡に就て少しばかり滑稽談を紹介せんに、かの有名なる詩仙黃山谷の友人に顧

子敦といふ男であつたが、身體頗る魁偉で、所謂大男總身に智惠の廻り兼ねたものと見え、山谷と同じ塾に學んだ頃、夏になると何時も晝寐を始めた、そして中々に覺めない、そこで一日山谷は子敦の大字なりに寢そびつて居る胸腹の間に一詩を題した所が、かくと知らぬ子敦は夢覺めて後腹の皮のこだはると思ひ、衣を脱ぎて初めて黃山の惡戯を知つたれども、其詩が頗る巧であつたゆゑに怒るにも怒れなかつた、其詩意は「睡と不睡とは人に依るので其是非は定め難い、念慮多きが故に眠ることの出來ぬ者もあるし、又愚にして思ふことがないゆゑに眠る者もある」といふのであつた、子敦は果して愚であつたか、將又念慮が少かつたのであるか、其午睡癖は今日にても不可解である、陸放翁の詩に左の如く歌つた滑稽がある

相對蒲團睡味長 主人與客兩相忘

須臾客去主人覺 一半西窓無夕陽

次に我國にも古來午睡坊はあつたものに相違なく、祇園の午頭天王の如きは五月五日

を除くの外は毎日午睡し玉ふたといふ、朝寝坊や夜舟を漕ぐよりも夏の午睡は罪のない方かも知れない、學者の間には春の日長より午睡は始まつたものと見えて、伊勢の麥林の閑した加州の點取の巻にも「長き日は机はなれて一ねいり」とあり、此附合句に「花の吹雪もしをり迄散る」とあつたといふ、實に紙折の吹雪に散るも知らで午睡を貪るは、太平の民ならずんば能はざる藝當である

又かの大我上人が自ら午睡し、且つ山僧を晝寝より起された詩歌がある

金仙齋後暫安眠 食患除時坐三法筵

今日山僧爲三晝寝 將來自作三瘦牛一牽

かく自ら吟つゝ午睡の僧を起すとて

晝寝すれば牛となるとなこれおほん

まふくおきよ角はへぬまに

午睡をすれば牛になるとの子供嚇しを詩歌に引かけてよまれたものである

兎に角午睡は我國古來の習慣となつて、暑き日の疲勞を癒する一方法となつた、さればこそ俳諧の季節中にも立派に編入せられて居るのであつて、芭蕉翁は「ひやくど壁をふまへて晝寝かな」の句を残し、可曉は「ひつそりと田植の跡を晝寝かな」とて田家の狀を寫し、一茶は「山水に米をつかせて晝寝かな」とよみ、更に「人を見て又々無理に晝寝かな」の警句を吐て居る、午睡も時を失はず、度を過さねば確に鎮夏のー良法に相違ない

22 洪水雜感 (天災と豫防)

諺に「屁をひつて尻つぼめ」といふことがあるが、洪水が起つてから俄に治水策を持ち出す如きは實に文明人に不似合な話である、之に就て想ひ起すは古人の説とて穴勝ち馬鹿にならぬ事で、天明六年七月十二日より同十四日迄降り續いた大雨が十五十六兩日にかけて江戸一圓の山の手を除く外の大洪水となり、兩毛秩父領まで前代未

聞の出水となつたことがあるが、其の時の識者の説にては、かく江戸の下谷淺草まで洪水に罹るといふのは全く疏水といふことを疎かにした結果である、急ぎ中洲町と兩國の出洲を處分せよといふので、寛政の初め遂に兩國の出洲を廢して舊の如くに浚はせ、次に中洲を掘取らせて舊の如くに河筋として仕舞つた、それが爲に翌年より洪水の難はあつたけれども、本所深川のみにて、前年の如く御成道を船で渡り、小石川や牛込で溺死する如き騒ぎはなくなつたと舊記に残つて居る、して見ると河浚へといふことを等閑に附し、唯だ交通の便利をのみ目途にして下流に洲などを築く時には、自然に水の疏通悪くして上流の土地を水難に罹らしめる虞れあることを知らねばならぬ、現に月島を築いた如きは、全く東京の出水を大ならしめた原因に數へても更に抗辯することは出来まいと思ふのである。

當時兩國の出洲と中洲とを舊の如くにするといふので、秋より冬にかけて、江戸中の屋形船や屋根船の屋根を悉く取拂ひ、にたり船など、一列に干潮を見て洲を掘崩させ其土を積んで運ばせた、そこで例の蜀山人が之を見て一首をよんだことがある。

屋根船もやかたも今は御用船

ちうつんやんでつちつんで行く

兎に角、以上の事實の如きは治水上確に參考すべき點があると思ふ。一體源流の遠き川は下流に至るほど、年々上流の土砂を運び來る故に河底が何時しかに高くなり、川の中央に洲などが出来るものである、其洲を河の中央に見て異様に感じて居る内に、遂に大洪水を來す、これは一には河心が高くなつて居る故である、加之山林の濫伐といふことが非常に出水と關係があるのであつて、山中の樹木を多く伐り出す時には、一には其樹木の吸収したる水分をも、伐採後には減少するとなり、二には樹木を伐取つた爲に山の地盤が弛んで土砂を多く流す、それが一朝の暴風雨に非常の勢を以て土砂を流し又水勢を増すこととなるのである、さればこそ橋南谿子の如きも諸國遊歴の實験上左の説を吐いて居る。太平日久しく人民繁茂するゆゑ、家屋

器物も昔よりは年々月々に多くなるゆゑ、深山幽谷の材木も今は斧斤の入らざる地もなく、多くは切あらしたるゆゑ、雨降るたび毎に、山々谷々の土砂流れ出で、次第に川に出で浅く成るにや、京近邊にても近江國の湖水など四方へ廣まりたること、四方ともに數十丁に及べりぞ、白髯明神の鳥居も昔は陸地にありしが、今は湖水の底深く入りて見えす、竹生島の瑪瑙石の橋も、今にては水の底數丈下に成れり、是れ湖水の底に土砂流れ入りて浅くなりしゆゑ、水四方に溢れて湖は廣く成り、水面は高くなりたるなるべし、淀川などにも昔とは水面大に高くなり、淀伏見の間の堤なども、むかし堤の上にあらし並木の松今は堤のすそにあり、堤の外の田地よりは川中の水面高きこと數尺に及べり、七八十年前よりは七八尺を違へりといへり」

實に南谿子をして先見の明を成さしめた我國年々の水害は、固より不可抗の災害とはしへ、一には人工を以て天災を減少せしむる豫防を怠つたのと、二には眼前の利便にのみ着目して、山林の濫伐や下流に疏水を妨ぐる洲や島を築いた如き不用意に基

て居るのである、これは後世人の須らく殷鑑とせねばならぬ所であらう。

23 菊花の教訓 (品性の修養)

菊の花は古くより、我國文人雅客の愛する所となつて、終に之が培養に苦心するに至つたものである、さてそれに就いて教訓的の歌句を殘すに至つた 其中歌の方はスラリと其趣をよんだものが多くて、さまざま深い教訓を殘して居らぬが、俳句の方は如何にも斬新なものや、奇抜なものがある、

よく人口に膾炙して居るのは

今日になりて菊作らふと思ひけり (三川)

黄菊白菊其外の名はなくもがな (嵐雪)

ごゝいふのであるが、如何にも後悔先に立たぬとの戒は知りつゝも、ツイ怠つて、少年老い易く、他人の成効を見て徒に羨む類ひ、或は人は才力體力に限りあるものを、

種々の事に手を出して、何一つ圖抜けて成就することもなく、古くより萬藝よりも一心とある諺を無にして、後悔する者多きものなれば、これらの述懐として、以上の句も自然に出るやうなものである、近頃感じたのは

菊の香の雨に動かぬさかりかな (菊莊)

の句で、何事も元氣に満ちてさへ居れば、多少の障碍が出来たとて、ビクとも動くものでない、此の氣概は人としてなければならぬことである。又感じたのは

白菊は秋の誠を咲きにけり (連志)

の句で、誠實が終に現はれて、如何にも床しい香ばしい徳望あるの人となることは、誰も心掛けねばならぬことと思ふ。又

人柄も古風になりて黄菊かな (史邦)

とある如く、人は其の平素の親しむ所によりて品性までが自づと外に現はれるもので聖賢の書を友とすれば床しき心根となり、ハイカラな草紙を好めばどうしても輕薄兒

となる。さて又例の一茶はいつも奇抜に

大名と肩並べけり菊の花

勝た菊大名小路通りけり

とよんで、如何にも勝利を得たる盛時には人も羨やむほどの富貴榮達を得るのであつて、之は誰しも望む所であらうが、それよりも寧ろ清貧にして道を樂むの勝れるに如くはない、即ち

小菊なら繩目の耻はなかるべし

といふやうに、人は須らく其の才能を自覺して、及ばぬ大望を抱かぬに限る、而して各々其の天職とする所を盡せばよい、さすれば小菊は小菊だけに、小綺麗に咲いて、さして大なる繩目の耻も受けず、マア綺麗だこと、朝夕の眺めに供せられるのである、次に又嘗て感じたのは、

抱一上人、植木屋何某が庭中の作り菊を譏りて

菊花の教訓

見劣りし人のこゝろや造り菊

の一句である。當時は巢鴨染井にあつた作り菊が再興して團子坂の菊人形と姿を變へたものであるが、之は決して菊を愛玩するものではなく、其の人形の、而も俳優の似顔を愛するものである、今日にては團子坂は淋れて兩國國技館に其妍を競うて居るのである、之は人形よりも似顔よりも、電気仕掛や、廻轉バナマを愛するのであつてこれ亦眞に風流に出で、菊花を愛するものではない。之は小供衆の御慰み、大人でも固より觀て悪い事はないが、唯だ旨い仕掛だ、面白い趣向だと賞めるだけの事である。それよりも菊を愛するといふ方からいつたら、離に沿うて咲いて居る黄菊白菊の方が趣がある、餘り作り拵へたのは見事なだけで、奥床しい自然の趣はない、そこを抱一上人はさすがに世の輕薄を思ひ浮へ如今人心黄金によりて、どうにでもなり、斯の道は棄て、堵の如き有様である、丁度造り菊の下に、唯だタワイなく集まる世態がそれで、其の現金主義たる、如何にも歎かほしい次第であると、靈覺せられたもの

である。之は文化の昔語であるが、此の傾向は、今日に於て一層強く深く人心に染み渡り刻み込まれて居るではなからうかと思ふと、實に長大息に堪へぬ次第である。長くも明治天皇の御製に

五十鈴川きよき流れの末くみて

心をあらへ秋津しま人

と仰せありし如く、今は我が國民たる者の、悪き風習に染める心の汚れをそぎ、身の垢を洗去らねばならぬ時である。それには五十鈴の川のきよき流の我が國體の本源に溯りて、皇國の清き貴き御教を奉ずるより外はない。

24 歳暮の戒 (整理と勤儉)

人は一遍經驗をすると二度と失敗を繰返さぬやうになるものであるが、歳暮ばかりは何遍經驗をしても矢張り失敗の上塗りをして居る、かの川柳點に

お留守かへ又来る年も空財布

とある如く、どうも年末には空財布ばかり残つて餘裕を生じない。これは豫めの覺悟が足らぬといふばかりでなく、實は世の中の事は當事と何とやらで、意外に向ふから外れることが多いからである。然し向ふから外れさうな事を當にして居つたのが、元來此方の不覺であるから、平生に確實なりと信ずる點だけを當にして、それによつて標準を立て、一年の計をするがよい、それが眞の覺悟といふものである。

そこで歳暮によつて何人も得る所の教訓を列べて見るならば、先づ第一に

整理の必要を感ぜしめることである。即ちかう取亂し取散して置いては手の付けやうも足の踏み入れやうもない、これはどうにかして取片付けねばならぬといふ如くに歳暮になると、先づ何人も整理といふことに心を傾けるやうになる。

一體人間は吞氣に出來上つて居る動物でマアさう急がなくてもよい、マアどうにかなるだらうといつて、ツイ放任する、怠ける、ツルける、此マアといふ奴やダラウ

といふ奴が後來吾人をして頗る狼狽せしめる先生である、暮につくものは餅搗ばかりでなくて、マゴつく、ウロづく、キヨロつくといふ如き多くのつくに出逢つて、終に借金取りに嘘をつくといふ段取となるのである。これは畢竟身から出た錆で、今更誰を怨まんやうもない、即ち豫めの覺悟が足りなかつたに基づくものである、狂歌にもある通り

人毎に春はブラ月夏ア月

秋はヨイ月冬はマゴ月

之は人間の通り相場で、樂をした後は苦しいのが當り前で、吞氣に暮したドン詰りが暮に尻が落付かすして糞詰りとなる原因である。

第二に得る教訓は節儉の實行といふ極ケチな教訓である。節儉も豫め計を爲しての儉約なれば、大なる價值もあらうが、押詰つての節儉などは餘り譽めた方でもない、然し誰しも大抵之を實行せねばならぬといふのは、如何にも不甲斐ない譯であるが、こ

れも矢張り不覺悟に基づく失敗である。

年の暮互にこすき錢遣ひ

平日ならばヤアそれは僕が奢らう杯といつて大東に出る先生も、暮に及ぶと小聲になつて君、金がないか、あるなら貸して呉いなごといつて、大將が俄かに兵卒に成り下つたなどの萎れ方である。然しマアかく節儉を實行して、越すに越されぬ年の關を越さうといふ了簡が出るだけが先づ人間の正直な所である、さてこそよい加減に年を越して、又新なる年を迎へて元の呑氣に復るといふことは、人間は實に御目出たく出来て居るものである、一茶句あり、よく穿つ。

先づよしと大三十日の寢酒かな

第三に得る教訓は反省悔悟の念を起すことである、俗に發心をするといふのが是である、ア、詰らぬ事をした、是ではならぬ、來年から一つ改革をせねばならぬ、如何に改革すべきか、されど刻下の苦を如何に脱るべきか、なご、反省と悔悟の念とが雜然

紛然として胸中に湧く時は、人は一念發起して茲に頭が新しくなりかゝつて居るのである、之を眞に清新なる頭たらしむるは、吾人の發奮努力を要する所ではあるが、兎に角一人前の男ならば、是位の勇氣は出るであらう、出ぬやうな男ならば最早仕方がない、豈に雷に男のみ然らんや、女とても其通りである、其角の句に

行年や壁に耻ぢたる覺え書

かく反省し悔悟して新たなる運命を開拓し、新たなる天地を發見してこそ、人の人たる價値は存するのである。

勿レ謂今日不レ學而有ニ來日。勿レ謂今年

不レ學而有ニ來年。日月逝矣歲不ニ我延。

嗚呼老矣是誰之愆。(朱文公勸學文)

第四に得る教訓は忍耐自重の精神を試し得る機會となることである。人は苦しい時に臨んで、初めて其の實力を見ることが出来るのであつて、又精神を鍛練することも出

來るのである、暮の行詰りの爲に狼狽し煩悶し懊惱した所で、それは後の祭りであるのに、之をチツと押へ付けることが出来ぬやうでは耐忍力のない者といはねばならぬかの伊藤仁齋が籠居して經學を究め、歳暮の用意さへ出来ずして、幼児より餅を迫まると、徐ろに着けたる羽織を脱ぎ、これを典して兒童の満足を買つて遣つたといふ如き態度は、學者として天晴れなる振舞である、勿論歳暮の用意なし仕舞に終つたらば、仁齋固より價値はないのであるが、彼は今の刻苦は他日の成果を持來らす所以なりと信じて、之が爲に心を亂さず、かゝる際に忍耐したのが、其偉大なる點である否なこれほどになくとも、せめて出來得る忍耐をして取亂さず、又自ら信じ自ら重んじて泰然たる所がなくてはならぬ、即ち古句にある通り

人並の心持ちたし年の暮
年の暮嬉しや今日も腹立たず
でなければならぬ。

第五に得る教訓は、人生に取て高尚なる道徳心を涵養し得る機會となることである、それは外でもない、歳晩に當て自己を顧み祖先父母を追想愛慕して、深く戒む所ある如きが之である、越人の句に

行年や親に白髪を隠しけり

とある如きは、如何にも老萊子や伯瑜の孝も想ひ出されて床しき限りである。又一の句に

行年や又親達に遠ざかる

とあるが、これ亦孝心の溢るゝばかりなる真心が見える、即ち壽命に一年を縮むれば生前の父母に遠ざかり、又亡き父母の追薦回忌も一年を増するのであつて、何れも親に遠ざかることに相違ない。

以上の教訓は歳暮に際しての精神を修養すべき要點であると思はるゝのである。

25年の關 (苦樂の境)

古人は時々ときどきに面白おもしろい教訓けうくんを遺のこして居ゐるが、此頃このころ燈下とうかで虫喰むしくんだ書しよを繙ひもといた所ところが、年の關としのせきと題だいして、下しもの如ごとき文字もんじがあつた。

年の關としのせきは至いたつて難所なんじよにて、ひとしへの月日つきひ、登りつめたる冬ふゆと春はるの境さかひにある關せきなり。世渡りよわたの人々ひとびと貴賤きせんおしなべて、越こさねばならぬ關所せきじよなれども、金銀きんぎよの手形てがたなければ通とほることなにかぬる、甚はなはだむづかしき關所せきじよなり。

年の坂としのさか、年の市としのいち、皆みなあたりの名所めいじよなり、又また爰こゝに掛鳥かけとりといふ鳥とりすめり、人ひと甚はなはだ之これを恐おそるゝことなり。

分わかり切きつた事ことを、面白おもしろうよませたるので、これが時ときの古今ここんを問まはず洋やうの東西とうざいを論ろんせず、毎年まいねん一度いちどは必かならず來きたるものに極きまつて居ゐれども、兎角さかくし始末しまつをよつく付けて置おく賢人けんじんが少すくい、それで茶菓子主人ちやくししゆじんの作さくのやうに

大晦日

催促頻々掛取多、工夫面諸方孔

向椽欲撞無間鐘、手水鉢凍持不動

澁面苦面しぶめんくめんを作つくらねばならぬ者ものが少すくからぬのであつて、梅うめケ枝えだの手水鉢てすずはちを叩たたいても、千兩ちりやうはおろか鏹びた一文もん出でることでない、若もし夫それ四方よも赤良先生あからせんせいの

金かねもあり、掛かけも拂はらふて置お炬燵こたつ

そろ／＼寝入ねいりつかん年の夜よ

といふ樂隱居らくいんきよをきめやうといふには、どうしても一年ねんの計はかりこを元旦げんたんよりきめて掛からねばならぬのである。

大我上人たいがしやうじんが面白おもしろい歌うたをよんで居ゐられる。儒者しゆしやの歲暮さいぼ

この暮くれは論語ろんご道斷だうだん孔子こうしでも

心老子しんらうしでも子貢まうし子まうしやうなし

歲暮の戒

季節と修養
佛者の歳暮

極樂をねかふおもひぞまさりける
さてもくるしき此の暮

人に教へる身でも矢張り此悔があるのであるから況んや凡人俗士に於てをやである。

大工の歳暮

のみすぎて、はらひすみかね鋸の

めもあてられぬ歳のくれかな

これが世上だらしなき一般の例である。

所で生活上のいやしき事などは之はどうでもよいとし、人の此世に生るゝや犬猫とは異つて、少しは目的とする所がなくてはならぬ、それは唯だ食ふために働くばかりでなく、働くために食つて、そして世のため國のため子孫末代のために、少しでも幸福を與へ進歩を補ふやうにして、何時かは此世からなる理想の樂天地、即ち極樂世界を

實現せしむるやうにせねばならぬことである、所がそれがどうも不斷承知しながらもツイうかくと仇に此世を過して、空しく悔のみを残すのであつて、之を思へば年の暮の關所を越す時には、實に惜いやうな残念なやうな心持のせぬものはあるまい、元政上人の年の暮の歌にある通り

けふ暮てあすはまた來ん年なれど

もとの月日のかへりやはする

かく思ひ付くも、如何にも慚恨の念に堪へぬので、

行年や壁に耻ちたる覺書

其角宗匠のよんだやうに、慚恨の覺書でもして、更に明年の覺悟を定めねばならぬことである。

一とせをあだにくらして昨日けふ

をしむや何の心なるらん

歳暮の戒

もらさじと思ひいとなむ事わざの

けふになりては猶のこるかな

なをざりと思ひし年の一とせも

老ては重きかすにそひぬる

けふ毎のことくさなれや徒に

今年もかくてくらしけるかな

下編 處世と修養

1 果報 (福徳圓滿)

世間の人は福徳圓滿の長者を果報者といつて居るのでありますが、抑々其福徳圓滿とは何であるかといふことを究めたものが少いゆへに、從て眞の果報といふことを合點したものが少いやうであります、古人がよき果報の種類を擧げた中に、(第一)富貴(第二)長壽(第三)芳名(第四)無病(第五)子孫の孝順(第六)安心、と示してあるのがありますが、是等は誠によく福徳を説明したものと思ふのであります、何故なれば金錢に不自由をせず、生命も長く保ち、そして世に芳き名を出し、其上年中病氣がなく、自分の子孫は孝行でおとなしく、先づ何事も天下泰平と安心をして行くことが出来たならば、これほど結構な身の上はなく、又これほど福徳の圓滿したるものはないか

らであります、然しながら以上の六ツの果報とても其分量に制限のある事でありまして、古き諺にも「九分は足らず、十分はこぼるゝと知るべし」とある通り、之を一々十分にと望んだならば、反て其福徳をこぼして仕舞ふことになるのであります、それは金が餘計に欲しいといつて無理非道をしたり、官位が一層上りたいからといつて邪曲讒言をしたり、或は長生を此上にもしたいとて保養に過ぎ、名譽を益々高めたいといつて危険にして力に及ばぬ事したり、無病で居たいとて身體の鍛錬を缺いたり、子孫に孝行をして貰いたいとて馬鹿に叱り飛ばし、安心をしたいとて世上の出来事を恐れて猥りに之に遠ざかるといふやうであつては、反て其果報を逃がして仕舞ふからであります

されば福徳果報といふものは、先づ足らず目位に満足をして餘計に求めぬ所に宿るものといふことを知ればなりませぬ、たとへば金銭は衣食住や娛樂を求めぬために無くてはならぬものでありますけれども、之を身分不相に持ったとて、必ずしも己が

欲する儘に使ひ得るものでもなく、反て心配の種となります、それゆへに西洋のセツクスピアといふ人も、妄に金を溜めることばかりを心掛けて居る人を、恰も金塊を負ふたる驢馬に同じといつて、其驢馬は外から見れば大層な金塊を負ふて結構なやうであるけれども、驢馬自身には實は重くて堪へられぬのであります、そしてつまる所苦しい長旅をして、終に死ぬ時になつて、漸々其重き荷物を卸すことが出来るのであると申しましたが、如何にも名言であると思はるのであります、こゝが即ち人は足ることを知らねばならぬ道徳の必要な所以でありまして、之を知足といひます

足ることの足りて足るのは足るでなし

足らで足りぬる身こそ安けれ
 安心といふことも、畢竟は此知足の心得を知つて居るものにのみ始めて味ふことが出来るのであります、西哲の言葉に「さらば金は之を手を保て、之を心に保つことなかれ」といつたのも、ツマリ知足といふことの必要を説いたのに外ならぬのであります

又官位であつたとて、貴い身であるからとて必ず幸福といふ譯には参りませぬ、官位が高ければ高いだけ責任といふものも多く大きくなり、又品格といふものも重んぜねばならぬのであつて、決して安樂といふことは出来ずまい、それよりも人は其地位の如何に拘はらず、世に善い事を遺した方が、如何に幸福で安心であるか判りませぬ、イギリスの賢い人の言にも、「陋き屋に住みながら、最も莊麗なる國の王城を驚かす方が、王城に住みながら、何も驚かすものがないよりも更に幸福が多い」といふのがあります、これまた名言であります、一體、富貴といふものは、百人が百人ながら之を得んとしても逆も得ることの出来るものではありませぬ、然し善人になるとか賢者になるとかいふ事は、百人が百人ながら之を得やうと思へば得れるのであります、故に之が萬人を通じて眞に社會の幸福に外ならぬのであります、之もツマリ知足といふ心掛があつてこそ、始て悟り得る道理であります故に、人にして若し果報いみじき者とならうと思へば、妄りに富貴長命を望むよりも、無理非道をせずして、先づ善人賢

者にならうといふことを心掛けるのが肝要であります。

2 長命法 (心身の養生)

人は誰しも長生をしたいと思はぬ者はなく、其長生をするには先づ第一に養生をせねばならぬといふことを知らぬものはないのであります、然らば其養生とはどんな事をするかといへば、大抵の人は飲食を慎むにありといふに過ぎませぬ、然らば飲食を慎んだ人は屹度長生をするかといふに、必ずしも然らずして、反て随分無鐵砲な事をした人が長生をする場合もあります、之はごういふ譯かといふに、ツマリ養生といふことを餘りに狭く軽く見て居る過誤であります。

元來人の生きて居るのは獨り血が通つて居る爲ばかりではありません、其血を程よく萬遍なく全身に行渡らせる所の氣といふものがあつて、其血と氣との旨く調和する所より生きて居るのであります、其證據には鼻を掴み口を閉じたならば、人は三寸息絶

えて直に死んで仕舞はねばなりません、それゆへに人の此世に生存するをイキルといひ、又イノチといひます、イキルは息をして居ること、イノチは其息の内即ち略してイノチといふのであります、然し又何ば空気が大事である、息が必要であるといつても、普通の人は仙人のやうに風や露を吸つて生きて居られるものでなく、血の元になる所の食餌を取らねば終には倒れて仕舞ふのであります、それゆへに養生の秘訣といふことを知つて居る人は、古來皆この氣と血の二つを保養することを心掛けぬものはありませぬ。

然らば養生といふことは一體どうしたらよいかといふに、第一に慾といふものを程よく用ひるのであります、即ち飲食の慾、歡樂の慾、榮利の慾といふ如きものを、何れも控へ目にして餘計に使ひ過ぎぬことであります、旨いオイシイといつて食ひ過ぎをする、それで身體をこわす、面白いくといつて夢中になつて樂みを仕過る、それが原因となつて終に健康を害したり、懷中を淋しくして仕舞ふ、ウマイ／＼かうすれば

身代が殖へる地位が進むなど、いつて無理非道をする、餘計な心配をする、人の怨を受ける、それが何時しか身心を害する基となつて、矢張り短命で終つて仕舞ふのであります、それゆへに日本でも支那でも西洋でも、長命にして成功をした人の言葉を聞いて見ると、皆慾を少くせよと戒めて居らぬ者はありませぬ「吞氣に暮せ、無理をするな、機嫌を能くせよ、食物を節せよ、運動を怠るな」など、示して居ります、これは一言にて申せば、慾を少くすることで、言ひ換へれば精神と身體との兩方を煩はし害はせぬやうにせよ、と教ふるに過ぎないのであります。

所で此養生の心得に就て、曩に特旨贈位のあつた杉田玄白先生の教訓を紹介しませう、玄白先生は御存知の通り、我國蘭學の開祖でありまして、千住の小塚原で始めて人體を解剖して、大に醫藥の點に發明をせられた大家であります、先生の養生七不可といふに、下のやうに説いてあります。

(一)昨日の非は恨悔すべからず、(二)明日之れ慮念すべし、(三)飲と食とは度を過すべから

す、(四)正物にあらすんば苟も食はず、(五)無事の時は薬を服すべからず、(六)壯實なるを頼みて房を過すべからず、(七)動作を勤めて安を好むべからず、これは誠に名言であつて、養生の要を盡して居ると思はれますが、ツマリは精神と身體との兩方を傷害してはならぬとの戒めで、之を一言に申せば慾を節せよといふことになるのであります。

3 時間の使用法 (古今の教訓)

古より時間の貴いことを知らぬものはないのでありますが、知りつゝ之を等閑にすること、時間より甚だしいものはありませぬ、然るに其等閑にした時間の事を忘れて仕舞つて、自分にはどうも時間が足らぬと繰返して唧つものが多いのであります、然らば其人は眞に時間が足らぬのかといへば、一日の中、其七八分まではボンヤリとして何の爲すこともなく、又自分の目的とすることに對しても更に大に爲す所

なく、是非爲さねばならぬことをも、先く後程にとか、或は明日にぞかいつて延して居るのであります、かくては時間の足らぬのも無理はありませぬ、ツマリかゝる人は大切なる時間の内で、遊ぶ方は之を時間に算へ入て居らぬのであつて、人間僅か五十年の短き生涯を何時までも限りなきものゝやうに思ふて居る愚昧より起つたことでもあります、されば古への聖賢も其愚を憐んで、屢々適切なる訓戒を下されて居るのであります、兎角取つ代へ引き代へ生れ来る人間が、其青年の間に其處に氣が附かずして、晩年に至て後悔の臍を噛むのは、どうも致方なきことゝ言はねばなりません。

盛年不重來、一日難三再晨、及時當勉勵、歲月不待人 (陶淵明)

わかき時まなびよくせで白髪

あいて悔ゆとも甲斐のあらめや

少年易老業難成、一寸光陰不可輕

(白居易)

をしめたゞ過ぐる月日は行水の

時間の使用法

流れてまたも歸りやはする

昨日といひけふとくらしつ飛鳥川

流れてはやき月日なりけり。

これは時間の貴ふべく、同時に人間は一日も勉強を怠つてはならぬとの戒であります
が、更に具體的に此貴ふべき時間の使用法を考へて、人は此日一日を適當に立働くこ
とを圖らねばなりません、然らば其使用法果して如何ぞやといふに、先づ古人の實
驗に徴して見るに(第一)一日の事業と用務とを適當に都合よく配列すること、(第二)
豫定の事業と用務とを少し控へ目に少量にすること(第三)一定の時間よりも少し早目
に豫定の事業と用務を完了すること、以上の三ヶ條に過ぎないと思はるゝのでありま
す。

蓋し人にはそれ〴〵一定の事業といふものがあり、又用務と云ふものがあります、そ
れゆへに今日は是非此事業の幾分と此用務とを片付けて仕舞はねばならぬ、又此仕事
は綿密で沈思を要することであるから、是非午前中に仕上げて仕舞はねばならぬ、此
用務は午後二時より取掛れば必ず日没までには片付けて仕舞ふ故に、かく決めて置か
うといふ風に、適當に都合よく一日の時間を事業と用務に配當して秩序立て、兎に
角目鼻の附くやうに取片付けることが必要であります、之が即ち第一ヶ條の心得であ
ります。

然しながら人間萬事豫定通りに行くものではなく、自分の都合もあれば場合もあり、
又他人の都合場合といふものがあつて、始終事業の進行や、用務の所辨を妨げられる
ものであります、それゆへに少しは其處に融通の付くやうにして置かねばならぬので
ありますから、豫定の事業と用務といふものは、多くを貪つてはなりません、少し控
へ目にして、時間が餘るといふ位にして置かねばならぬのであります、然らざれば不
時の出來事や不慮の變事に應ずることが出來ませぬ、之が即ち第二ヶ條の心得であ
ります。

尙ほ一定の規則通りに事業を計らひ用務を辨するにしても、そこに少しは餘裕といふものがない時には、不意に起つた出来事などの爲に、折角八九分までも漕ぎ付けた事を其儘にして止めねばならぬことが起ります、それゆへに豫め其變に應ずるために、何事でも之に取掛つたならば、敏速に且つ撓みなくツン／＼と進行させて所辨して、豫定よりも少し早目に完了するやうにせねばなりません、然せば少しはそこに餘裕といふものが生ずるのであります、之が即ち第三條の心得であります。

英國の有名なるネルソン將軍は時間を非常に貴ばれたものと見へて、嘗て人に語つて「自分の一生涯の成功は、何事をも定めぬ時間より十五分早くしたのに基いて居る」といはれたさうであります、これが即ち前の第三條に該當して居ります、恐らく此語中には、更に第一第二の兩條をも含んで居ることは、かゝる心得ある人の勿論實行せられた所に相違ないのであります

かくの如く時間の使用といふものを適當にするといふことが、即ち眞に時間を貴ぶ所

以でありまして、其貴ぶべき所以を實行することが出来るのであります、たゞ口先ばかりで時間の貴ぶべきをいひ、光陰は「白駒の隙を過ぐる如し」とか「流水の如し」とか譬へ事を引くばかりでは何の効もありませぬ、さればこそ時間の使用法に拙にして終日マゴつき、更に一生の目的事業をも完成することが出来ぬものが多いのであります「遅かりし由良之助」一足早くばかくムザ／＼と」などの悔み言を爲すのは、決して舞臺で芝居のみでなく、實に人世座に於ける一大活劇であります。

若し時間を節約利用することの必要を感じするやうになつたならば、今日我國に行はるゝ如き「時間の懸直」なる弊害を漸次に減するやうになつて來ることでありませう、そして時間を守ることによつて、約束を重んずるの風習をも補ひ養ふことが出来るであります、吳々も時間の貴いといふこと、更に其貴き時間を如何に適當に都合よく使用するべきかといふことは、刻下我國に於ける必要問題と考へましたから、一寸讀者諸君の參考までに前言を費したのであります。

4 財の使用法 (經濟の消費)

前回は時間の使用法を御話し申しましたから、今度は財の使用法を御話し申すことに致しませう、財の使用法など、申せば、七八歳の頃からそろく買喰ひの味を覺へて金の貴いことを知り、ソレ玩具ソレ學校用品と一々金を出さねば品物を渡して呉れぬゆへに、成程金は旨く使はねばならぬものであると合點するのでありますが、然しながらソレだけで唯ヌーツと成長して、金は使はされるばかり、眞に金はごうして旨く使ふべきものであるかといふことを知らぬ時には、所謂坊ちゃん育ちと申して人に馬鹿にされるのであります。否御自分が既に御利巧でないのであります、そこで金をもうける、即ち財を生産するといふことは、誰しも毎日従事して居るのであります、此金をもうけるといふのは畢竟金を使ひたいから起るのであります、金は唯故なく使つてよいものではなく、旨く使はねばならぬのであります、之を經濟

學の方では財の消費といつて、大に研究して居るのであります、所謂死金を使はぬやうに、成るべく金を活かして使はんといふ趣意に基づいて居るのであります。考へて御覽なさい、同じ金を使ふにしても、直接にも間接にも何の利益をも與へぬ消費もありますし、之と反對に直接か間接かに何等かの利益を與へる消費があります、前が即ち死金で經濟學で申せば不經濟なる消費、後の方は金を活かして使ふ方で經濟の消費であります、所で更に考へて御覽なさい、同じ經濟の消費といふ中にも財を生産する効のない消費と、効のある消費との別があります、例へて申せば人々が毎日生活の爲に費す所の衣食住の費用といふ如きものは、直接に財を生産する効なき消費であります、農工商何れの職業でも其仕事をする爲に使用する資本といふものは、直接に財を生産する効のある消費であります、それゆへに生活の上に奢侈費を極めて消費を多くするならば、それは財を生産する効のない金を多く使ふのであります、無益に屬する分が多いのであります、之に反して生活上には成るべく儉約をし

てそれを職業上の資本の方へ廻すならば、それは財を生産する効のある金を多く使ふのでありまして、頗る有益となるのであります。こゝの區別をよく辨へて世に處する人を世渡りの上手な人といふのでありまして、必ず富貴繁榮の基を開くに相違ないのであります。

然し生活上の消費を少くするのがよいといつて、矢鱈に粗衣粗食し、無暗に吝嗇であつたならば、之が爲に身體は弱くなる。世間では評判が宜しからぬといふことになりませう。六づかしくいふと道徳上の法則にも外れて居るのでありまして、又經濟上の處世の法則にも悖つて居ることゝなるのであります。何故ならば身體が弱くなればそれだけ働が少くなる割合ゆへに生産力が薄くなるのは、言ふまでもないことであつて、其上吝嗇に金を積み重ねたばかりでは、其財が少しも生産力を持たず、且つ世間の評判が悪くては財を生産する力も間接に害はれて居るのであつて、結局生産力の乏しい者といはねばならぬからであります。

そこで人は浪費をしてもならず、さらばといつて吝嗇に流れてもならず、よく其中庸を得て程よく節約をして行かねばならぬのであつて、之を節儉ともいひ簡略ともいふのであります。即ち程よく節約をする、有益と無益とを簡び分けて無益のものを略する、これが所謂節儉簡略であつて、かく節儉簡略をするのはツマリ其餘財を蓄へて之を不時の用に供し、且又之を財を生産する方の資本に利用せんが爲であります。

人には病難死苦など、いつて、思はぬ病氣や測らぬ災難に出合ふものでもあります。又喜びの方で出産をするとか賀の祝をするといつても先立つものは金であります。然れば其不時の入用に供する金を平時より貯へて置く所がなくてはなりません。又人はそれ／＼に立身出世をせねばならぬ、それには資本金も多く入ります。商賣が繁昌すればするだけ金は多くかゝる、又人の上に立つにはどうしても餘計な費も入る、時には氣を利かして人を引立て人を補助し、又貧困者を救恤もせねばならぬ、然し是等は皆己が信用を増し地位を高め名を成し、結局間接の生産力を増す道理でありますゆへに

之を惜んではならぬであります、之を惜むのは矢張財の使用法を知らぬものであります。

5 堪忍の仕方

下世話にも『堪忍のなる堪忍が堪忍か、ならぬ堪忍するが堪忍』といふのがあつて、古來堪忍の説教は饒舌る方では口の酸くなるほど、聴く方では耳にタコが出来るほごに、ノベツ幕なしでありますけれども、ごうも堪忍をする者が少い、其證據には韓信や張良のやうに忍び難い所を忍んで、立身出世をしたものが、兎角數へるに足らぬのにも判るのであります。

然らば堪忍はごうしたら出来るかといふに、是には外部から來るのをジツと怵へ内部より出るのをギユツと押へるといふより外に途はありませぬ。外部より來るといふのは他人より仕向けらるゝ無禮、非儀、失敬、侮辱、輕蔑、嘲弄などいふ種々の壓迫をいふのであります、勿論是等の壓迫は時と場合によつては寛免容赦のならぬ事もありませんけれども、素々かゝる壓迫を加へるやうな者は思慮分別なく品格を損ふことも顧みず、耻といふことを忘れて居るものでありますから、よくて馬鹿者、惡くいへば半分狂人といつてよいのであります、世の中に馬鹿や氣狂を相手にした所ではほとつまらぬものはないと、當方に於て大觀してかゝれば自然手の出せるものでない、これが即ちジツと怵へるといふ力の根元でありまして、此根元を養ふのが即ち精神修養の一であります。

次に内部より出るといふのは、之は自分の私慾にひかれて外へ現はれんとする惡徳であります、身分も辨へず地位も顧みず、己が才能技倆をも思はず、たゞ目の見所耳の聴く所、鼻の嗅ぐ所、舌の味ふ所、四肢の快しとする所に迷ふてかうもしたい、ア、もしたい、とむやみにあせる願望であります、固より人には欲望といふものがあつて衣食住の慾を満し、身分上の慾を成るべく高めんと勵む所より勤勉もし、努力も爲し、

終に立身出世をすることが出来るのでありますけれども之は徐々に秩序を追ふて善い方に進んで行かねばならぬのであります、然るを無鐵砲に悪い方へ飛び出さんとする故に、遂に身を害し家を損ふ基となるのであります、之を無謀といひ非望といひ妄想ともいふのであります、これ亦心の修行といふものが積まぬ所より起る弊害であります、されば此内部より出る無謀、非望、妄想といふものをギユツと押へるには、さうしても精神を修養して其力を養はねばならぬのであります。

さすれば其ジツと怵へる力、ギユツと押へる力といふものは、どうしたならば養へるかといふに、これは決して力士になつたとて擊劍柔術をやつたとて得られるものではない、ツマリは人々の心の中に善い習慣といふものを付けるやうにするのであります、即ち吾人の心の中に善い習慣を養ふて人として是非せねばならぬことは勉めて之を成功するやうにする、義務を果すやうにする、之が爲にはどこまでも勤勉努力する、然しながら之と反對に人として爲してはならぬこと、爲しても益なきこと、爲して害あることは之をせぬやうにするのであります、家業に精出す、忠孝を重んずる、義理を辨へて實行する、出来るだけ節儉をして行くといふのは、即ち人として是非せねばならぬ所であり、之に反して酒に溺り色に耽り博奕に身を持崩すといふ如きことは人として爲して益なく害あつてつまらぬことであり、又詐偽をする、盗をするといふ如きは人として爲してはならぬことであります。

そこで先づ其爲すべきことを爲し、爲すべからざることを爲さぬやうにしたならば心は漸次善い方に進んで行くのであります、良習慣が付きます、さすれば内部より起る無謀、非望、妄想などいふ悪徳をギユツと押へ付けることが出来るやうになります、従つて外部より来る無禮、非儀、失敬、侮辱、輕蔑、嘲弄に對しても、之を大目に見、之を心に留めず、左のみ自分に相手にして益なきことゝ知つて、自然にジツと怵へることが出来るやうになりませう、そこで此力を養ふことを古來「徳性の涵養」と申しまして、却々に其奥義に達することは出来ぬものとしてあるのであります、兎

に角心の善い習慣即ち徳といふものを以て堪忍の力を養ふといふことが人として道に進む階梯であります、これを身に行ふのが即ち道徳であります。

6 眼の着け方 (快活と自重)

凡そ人として其身を立派に此世に處するには第一に眼の着け方といふことに注意せねばなりません、眼の着け方によつて、悲しいことも楽しく見へ、苦勞も反て幸福と思へるのであります、そして無精なものも、そんなら一つ働いて見やうかといふ氣が起るのであります、淘宮の開祖丸三翁の道歌にも

目が覺めて宿を立出で眺むれば

何處もおなじ春夏秋冬

といふのがあります、これは世の中の事は悟つて見れば左ほご苦勞にしたり心配するに當らぬものだといふ教訓であります、御覽なさい、天地の公平なる攝理は少しも變

らぬもので、何處へ行つても春は春、夏は夏であります、臺灣の夏が樺太の冬といふことはない、春に花が咲き夏に枝葉が繁り、秋に實のり、冬に凋むといふことは日限に於ては多少の相違はあるけれども、大なる狂ひはない、人間の身に取つても同様のもので、自分ばかりに不幸が來て、他人ばかり幸福が來て居る、一體神も佛もない世かなど、悔むのは、全くこれは自分の氣がひがんで居るからさう見えるのであります、勿論金の儲かる人もある、位や役の高まる人もある、然しそれが人間として生きて居る上に何ほどの幸福を與へるかといふに大した違ひもないのであります、世界の富豪といはるゝカーネギーが此程舊友に送つた手紙の中にも「金といふもの幾千積んだ所でほんの少しばかりの暮し向に樂を與へるに過ぎないものであつて、反て金持になればなるほど欲望が大きくなつて、漸々に微笑を人の顔より奪ひ去らるゝものである、其證據には百萬兩の長者は心の中より笑ふことは實に稀なものである」と記してツマリ人は愉快といふのを、終始胸の中に貯へるやうにせねばならぬといつたのは、これ

を足ることを知つて其日を愉快に暮す中に人の幸福は存在するもの也といふことを説明したものであります。此悟りを開くのは、最初の眼の着け方次第でありまして、古語に「天を怨みず、人を咎めず」といふのがこの戒であります。西洋人の教草にも「天は爲すだけの事を毎日して居る、然るに人は人の爲すだけの事を何時もして居らぬものである、これが即ち不幸の源である」とあるのは、如何にもよく穿つた言葉であります。之は東洋の賢人の教へに「人事を盡して天命を待つ」といふ言葉と殆ど同じ觀察點より出て居るのであります。皆眼の着け方の勝れて居るものであります。

そこで宇宙の森羅萬象に對しても、又日々其身に起つて來る事柄に就いても、之をいやなものであるとか、或は又苦勞なものであるなど、最初より悲觀してかゝるのを止めて、人はどうしても、人たる本分を盡さねばならぬものである、即ち人事を盡して天命を待つより外はないのであるから、先づ〜どこまでも忍耐をして己が目的を成

就しやうと奮發努力するやうにしやう、之が人の務であるといふやうに考へた時には更に不平不足は起らぬのであります。二宮尊徳翁の嘗て告げられた言葉に「人の勤惰は一言にて判るものである、夜十時頃になつて、もう何時であると問はれた時まだ九時過ぎであります御早う御座いますといふ者は勤勉の人で、之に反してもう十時前であります遅う御座いますといふ者は遊惰者であると、又告げられた言葉に「江戸は水を使つても金が出ます、恐ろしい所でありましてといふものは引込思案の人で、之に反して江戸は水を賣つても金になるといふ人は進んで事を成さうといふ精神がある人である」といはれた事がありますが、これ唯だ眼の着け方の異うばかりであります。古人が一毫の差より千里の差を生ずるといひましたのも、此處の戒でありまして、人は何事に對しても自ら卑うし自ら侮り、一人極めに悲觀してはならぬのであります。此の眼の着け方を成るべく勝れたものにしやうとするのが即ち心の修養といふものであります、こゝが即ち理想といふものを立て、人間向上の目的とせねばならぬ所以

であります、足利尊氏が戦争に負けて大に順逆の理に迷つた時に、夢窓國師といふ高僧が一首の歌を興へて

雲よりも高き所に出で、見よ

何とて月に隔てやはある

と諭された所より、尊氏が忽ち悟つて勇氣を惹起し、再び大軍を起して勝利を得たといふのも、ツマリ眼の着け方一つであります、これはどういふことかといふに、今かく南北朝と分れて居るが今日の場合は既に正閏を争ふことはいらぬ、所詮は早く戦亂を止めて國家社會を安寧幸福にさへすればそれが即ち臣下たる本分に適つて居る、何も北朝であるといつて、衆望の如何を迷ふことはない、唯だ天下の大勢を達観して正々堂々と事に従へよと示されたもので、如何にも高妙なる和歌であります。そこで人は成るべく心を廣くして氣を大きくして、そして公平無私に萬事に對するやうにしたならば、不平や不足も起らず、且つ煩悶することもなく、自暴自棄すること

もなくして、世を愉快に送つて行くことが出来るであります、これが即ち眼の着け方であり、徒に日蔭ばかりを見て、どうも自分には光明の途が見付からぬといふのは、人の前方を見ずして後方ばかりを見て居る迷ひ言であります、後頭の禿げた所を見ると大したる老人のやうであるが、面を會して見ると勇氣に充ちて居る人が幾らもある、之も眼の着け方である、何も悲觀することはない。

7 家庭の取扱方 (大括りと道徳)

すべて物事には豫め大括りといふものが定まつて而る後によく纏まりの附く如くに、一家の家計を處理するに就ても、豫め大括りといふものがなくてはなりません、古人が「元日や人のして置く計」といつたのも全く此大括りといふものを豫め定めよといふことであります、假令如何ほど毎日綿密に帳面を付けた所で、自分はドレ程収入があつて一日ドレ程支出してよいかといふ方針が定まつて居ない時には所謂月末

に至て勘定合ふて錢足らずの悔を貽さねばならぬのであります、かくては何時まで経つても家計の豊かになる時はなく、始終苦み抜いて居らねばならぬこととなりす、これは畢竟日々の生計上の程度といふものが定まらないからであります、大括りといふことは之を建築に譬へて見れば、家屋に要する材木の大小長短を別々に處理して梁、柱、敷居、鴨居、板といふ風に區別して大略其數を定めることであります、一家の經濟にしても一年間に衣服にドレだけ、一箇月の食料にドレだけ、家屋の借料或は修繕其他にドレだけを支出してよいかといふことは、其人々の収入によつて之を定むるより外はないのでありますから、豫め其収入の額が分つて居れば之に准じてそれ／＼に其振當額を定めて行けばよいのであります。固より人には不時の出來事、降つて湧いた如き事變もあるものでありますゆへに、一厘一毛勘定を外れぬやうに等といふことは無論出來る筈もないのでありますけれども、豫め一定したる衣食其他に就いて、其支出すべき額を定めて置けば、そこには自然に過不及があつて自づと融

通の付くやうになつて行くものであります、之を俗に大括りといふのであります、其大括りによつて遺線りを旨く付けるのが、即ち家計の取扱方の上手な者といつてよいのであります。

されば家計を巧みに取扱はんには、豫め大括りを定めて、其大括りを一日分に割當て其範圍を越さぬやうにし、成るべくは内輪に控へ目にして餘裕を生じて置くやうにすべきであります、此餘裕は必ずしも之を貯蓄せん爲ではなくして、不時に降つて湧いた出來事の方に廻すやうにすればよいのであります、所でこゝに呉々も注意して置かねばならぬことは、身の程々を辨へて決して增長心を起してはならぬことでありす、兎角人は少しく収入が多くなれば氣の大きくなるものであつて、其增長を直ちに衣食住の上にて行つて行くものであります、かくては前にいつた大括りの範圍を越して、一日々々で豫定額よりも其支出を多くするやうになり之を一月一年と積れば大した額となつて、ツマリ餘計儲けただけ餘計使ふ勘定となつ

て、差引少しも餘裕を生じないことゝなるのであります、古人の歌にも

春雨のわきてそれとはふらねども

うくる草木のおのがさまん

といふのがあります通りに、天の降す所の恩恵は萬物一様であらうけれども、梅には梅、櫻には櫻と、其受くる恵みの露の度といふものが異なつて居る如くに、人にも亦其分際に応じて受くる天恩の度が其時々によつて異なつて居るから、何人も其現在の身分地位を顧みて其度を越えぬやうにし、少しにても餘裕を積み、又勉め勵みて向上進歩して行くやうに、了簡の臍を固めねばならぬことであります、これは主として家庭の主人主婦の注意せねばならぬ所でありあります。

尙ほ人には少壯老の三期がありまして、少年より老年に至るまで、何時も同じ勤勞を爲すことが出来ぬ如くに、家計上に於ても其身分及び収入の差異によつて之を變更せねばならぬことは勿論であります、即ち大括りといふものを豫め定めるに就いても其

年齢の長短を測り、勤勞の度を定めて、衣食住其他の點に斟酌を加へる所がなくてはならぬことであります。

昔し支那の朱新仲といへる人は、人の一生を七十年と見積り、之によつて處世の計を定めたといふことでありますが、其言に依れば、十歳より二十歳までが少年で父母に養はるゝ時期、之が即ち生計、二十歳より三十歳までが丈夫で志健かに骨強く、名利を欲する時期、之が即ち身計、三十歳より四十歳までが位は高きを望み、財は厚きを願ひ、門は大ならんを欲し、子孫は盛ならんことを希ふ時期で、之が即ち家計、五十歳より六十歳までが心怠り力疲れ、善く力めて藏るゝこと蠶の繭を作るが如き時期で之が即ち老計、其後は夕陽山に春く如くで内に一心を觀して絲毫も憚るなきを要する時期、之を死計であるといつて居ります、一寸人生を達觀したる眞理であります。所が此の朱新仲は以上の五計に於て何れを望んだかといふに、他人が身計の事をいへば大に喜び、老計の事を以てすれば、答へず、死計を以てしたれば大に笑つたといふ

ことであります、して見ると矢張丈夫の時代が一番戀しいものと見えます。されば少年少女の諸子の如きは、今や漸く父母の手を離れて自ら有爲活潑に世に處して身の計を爲す時であることを思ふて、一番愉快に暮さねばならぬことであります、假初にも世を厭ふ如き弱き氣を起してはなりません、而して愈々家計を營む所の三十歳四十歳の時期に達したならば、平生思慮周密にして萬事に粗漏なきやうに戒め、其家道を昌へしめて父母たる、面目を全うし又世に紳士令夫人の名を高めるやうにせねばならぬことでもあります。

8 思ひ遣り (他人の心中を付れ)

東洋には「恕」といつて他人を思ひ遣るといふ道徳は行はれて居りますけれども、此恕といふは自分のいやな事は人もいやと思ふて仕向けず、自分の好かぬことは人も好かぬであらうとて仕向けぬといふツマリ消極の方に傾いて居るのであります、之と

反對に積極の方即ち自分の欲する所は人も欲するであらうし、自分の好む所は人も好むであらうとて、之を仕向けるようにするといふ道徳が甚だ缺けて居るようであります。

譬へて言つて見るならば此處に一人の儉約な人があるとする、此人は儉約して金錢を貯へようといふほどであるから、自分に金錢の好きな事は言ふまでもない、それゆへに他人より金錢を贈れば喜んで早速受ける、然ればこれに引當て、自分もかく金錢の贈遺を喜ぶのであるから、人も定めし人情として喜ぶことであらうとて、容易に遣すべき金錢を出すかといふに、其時には遽かに財布の口を堅く締め付けて中々出さない而して曰くこゝが儉約の必要な所ですと、かういふ人が世間には大分あるようであります。

何と之は道徳に適つた行爲でありませうか、自分の好かぬ所いやな事を他人に仕向けぬのは固より善い事に相違ないけれども、自分の欲する所、好む事は先づ黙つて仕舞

つて置くといふのでは、自己一人に私するといふもので、餘りに褒めたことではない今日の語でいへば、之が即ち個人主義の弊害に陥つたといふもので、支那人の氣風などは概して多く此方に傾いて居りはせぬかと思はれる、かゝる弊風ある人種には個人としての富裕者は多いけれども、社會事業はトンと發達しない、而して結局は世の進歩に後れることゝなるのであります、

吾人は決して西洋人を褒めて東洋人を貶すのではないけれども、此點に於ては、どうも西洋人の方が發達して居ると思ふ、それといふのが社會に重きを置き、交際上、取引上等に信用を重んじ、確實を主とする所より、自然他人の心中を忖度つて、かうもして他人を喜ばせ他人と懇情を温め從て信用を増し、交際を繁くし取引を盛んにして相互に利益を得るようになければならぬといふ積極的の「思やり」が行はれて居るゆへであらうと思ふのであります、ツマリ商業道德のよく行はれ公德の普及するといふのは、其根源たるや全くの所社會といふものを重んじ、共同生活といふことの必要

を解して居るからで、此に於て始めて他人の心中を忖度るといふ道德が重要視せらるゝのであります、

かくいへば我國には全く此道德が缺乏して居るかといふに、必ずしも悉く然りといふのではありませぬ、すべて何れの方面にも多少世人より尊敬せられ愛慕せられて居る人は、皆此「他人の心中を忖度る」といふ道德を履行つて居るのであります、昔時、加藤清正の家臣の飯田覺兵衛といふ勇士が語つた言葉があります、自分は眞實の所をいつて見ると、一生、主計頭にだまされたようなものである、初めて軍に出て功名した時朋輩も多く鐵砲に中つて死んだもう／＼こんな危い事はいやだ、武士をやめようと思ふて歸つて來ると清正はすかさず、今日は實によく働いて呉れた、神妙言はん方なしといつて名刀を賜はる、そこで其褒美のうれしさに又々高名をする氣になつて戰場に趣く、又危き軍をして今度は武士をやめにも思ふて居ると、清正すかさず、神妙奇特とて時を移さず、ソレ陣羽織、ソレ感狀よと下し置かれる、それには又朋輩の

譽める者もあれば人々の羨む者も多く、それに引かされて、ツイうか〜ど士大將たるを面白がり、かくは數十年塵を取る身となつたのであると自白しました、覺兵衛ほどの勇士がかういふのを見ると、たゞへ忠節無二の士でも之を使ふ所の主人が馬鹿で氣が附かなかつては、決して長く尻を落付かなかつたものに相違ない。ツマリこれは清正がよく他人の心中を忖度する道を知つて士卒の心を離散せぬよう、常に其思を勞したからであります。

清正に限らず、徳川三百年の名君賢相ともいはれ一世の名士と謠はれた人はそれ〜に其地位身分に應じて、等輩との交際より己より眼下の者に對しての待遇に心を配り思を勞したもので、かくてこそ人の上にも立ち他人より尊敬し愛慕せらるゝのであります、大正の今日とても無論これに變つたことはない、多くの成功者中にも其名の香ばしき方は大抵此點に注意したものに相違ありません。

そこで今後に望ましきは、世が開ければ開けるほど社交の必要は起り、懇情を温め信

用を増さねばならぬのでありますから、よく他人の心中を忖度りて其期待を満足せしむることの必要を解して、之を恕といふ心得と共に併せ行はんことを願ふのであります、別して人の上流に立つといふものほど此道徳を行ふために屢々心を配り思を勞することは恰も清正の覺兵衛を操縦した如くにならなければなりません、若し之を誤まつて前例に引いた儉約人の聲に倣ふては、それこそ人の風上には立てられないといつて、世の鼻つまみになることは明々白々であります、古の語に「士は己れを知るもの爲に死す」といふのがありますが、これはツマリ人の積極的の思遣りに感激して働く言に相違ない、即ち飯田覺兵衛が清正の爲に粉骨碎身したといふのも全く此語の通りで、而も此語を實行させる根基は所謂他人の心中を忖度つて人を失望せしめぬ點にあるのであります。

9 心のもち方 (謹戒十二ヶ條)

古人の教へ歌に

「心こそ心まごはす心なれ、心に心心ゆるすな」といふのがあり
 ます、又江戸芝居に住居をした池田家の御抱へ儒者有馬權藏といふ人が友人の夫婦中
 あしき者へ與へ論された歌にも、「心なき心におこる山風の、心の花を散しこそすれ」
 とある通り人の心といふものは兎角はもち方一つのもので、心を善くもちさへすれば
 左もなき事に軽々しく怒り嫉むこともなく、偽り飾ることもなく心は清浄、行は潔白
 従て心に屈托といふものなく、行に過失を生ずることもなく、愉快に此世に暮すこと
 が出来るのであります。つまり人の苦を招くといふは、心と心を苦め、我身を責める
 からで之ほど無益のことはありません、そこで先づ昔の心學者の遺した心の戒謹
 といふ箇條を左に示しませう

心に物ある時は我體窮窟なり。
 心に氣隨ある時は悔多し、
 心に邪ある時は人を損ふ、

物なき時は心廣く常にゆたか也
 氣隨なき時は悔なし、
 直なる時は人をそこなはず、

心に欲ある時は義を思はず、
 心に我慢ある時は愛敬を失ふ、
 心に奢ある時は人をあなごる、
 心に飾ある時は偽をおもふ、
 心に私ある時は人を疑ふ、
 心に過失ある時は人を恐るる、
 心に貪ある時は人に諂ふ、
 心に迷ある時は人を答むる、
 心に賤しき所存ある時は願多し、

欲なき時は仁義自ら齊ふ、
 我慢なき時は愛敬あり、
 奢なき時は人をうやまふ、
 飾なき時はいつはりなし、
 私なき時は人を疑はず、
 過失なき時は人を恐れず、
 貪なき時は人に諂はず、
 迷なき時は人を答めず、
 賤しき所存なき時は望なし、

右の十二ヶ條は誠によく心の戒謹を示したものでありまして、吾人は自身に願みて赤
 面せねばならぬのであります、恐らく之を御讀みになる御方も此十二ヶ條の内にはア
 アさうであつたと後悔せらるることが屹度一ツや二ツはあらうと思はれます、それを

ないやうにとするのが修身で、即ち心のもち方を善くすることでありませう。
然しながら人は兎角に自分の事を悪しとはいはず、他の事になると兎や角と批難をします、昔し麻布に住居をした旗本にて藤田某といふ人は俳號を稻冬といつたが其人の句に

木喙の晝を笑ふて水鶏かな

といふのがあります。水鶏は自分の夜叩くの最もよき事と心得て居るものか、晝の木喙を冷笑ふて居る、所が木喙の方ではナニの水鶏め、夜ばかりコト／＼と忍び音をさせ居つてと嘲つて居る、といふは鳥獸ばかりでない、耻かしながら全く人事である、これは御互に自負、自慢に陥ることを避け、別しては其非を飾り覆ふといふことを戒めねばならぬとの意であります、

古人の和歌にもある如く、「いつはりも人にはいひてありぬべし、心の問はばいかか答へん」反省して見れば實に耻かしいことだらけ、それを無理に忍んだ所で、公平無私なる天地神明といふものが決して許すものではない、書經の洪範の編にも「其身正しければ影正しく曲れば影も曲る」といふことが載せてあります、これが即ち天地の公平なる裁判を直接に示さるるものと思ふて人は其非を飾つてはならぬのであります、大阪齊丸といふ人の句に

名月や我が影ぼしのあからさま

といふのも丁度之と同じ訓戒であります、之に就いて一場の面白き實話があります、昔し近江の國の或る田舎に平太郎といふ農夫がありました、其家の貧乏なる苦しさには隣家の畑物を盗むようになり、或る夜自分の幼兒を連れて例の如く隣家の畑に入り、大根、人参と手あたり次第に之を掘取つて持歸らうとした所が、幼兒が突然後方よりアレ父様見て御座るといつた、平太郎は驚いて、ドレ何處に誰が見て居るかと思はへり、誰も見ては居ないではないかといふと、幼兒が何の氣もなく、ソレ彼處にお月様が見て御座らつしやるではないかといはれ、平太郎はハツト胸を打たれ、其儘大根

人參を打捨てて幼兒を抱へて匆々に我家へと逃げ歸り、アアと溜息と共に懺悔後悔して天道様は恐ろしい、此子を借りて自分の悪行を戒めたまふたもの、モウ／＼さもししい心などは決して起さぬと、それきり以前の如く善心に立返つて正直なる農夫となり一生を安樂に稼いで暮したといひます、これが即ち人には良心といふものがあるといふ證據で、此良心即ち本心に立歸り、何事も本心に問ふて事を行ひさへすれば決して過失はないのであります、前掲の十二ヶ條も良心をくります所の十二の黒雲が掩ひかかつて本心の明を奪ふ故に、終には過失の因となるのであります、さればよく本心を見附けて之が命令に従ふよにせねばならぬことであります。

10 寡 黙

古より猿智恵と申しまして、一寸小才の利く所は結構であるが、どうも後の尻辮りといふものが付かないために、終に失敗して仕舞ふ人が多いものでありまするが、

これはツマリ大局といふものに眼が着かぬからであります、よく御經文の中に出て居る井戸の中の月影を取らんとしニグレイ樹の枝より逆さまに落ちて溺れ死んだ猿猴の譬へ話や、宋の狙公にだまされて、常に山中の果實を奉り、其報酬として朝に三ツ暮に四ツ宛あてがはれたのを大層に不平をいひ、そんなら朝に四つ、暮に三つにしやうといはれて、喜んだといふ如き類の話は皆其智恵の淺薄なるを示して、世間の人を戒めたものであります、然るに是等多くの戒めるにも拘はらず、人はツイ其淺慮小智の出過ぎる所より自ら禍を招き、他の怨みを買ふ所となるのでありまするが、之は一體どうしたら豫防することが出来るであらうかといふに、所謂傳教大師の三猿堂を學べばよいのであります、即ち天臺の「見ず、聞かず、言はず」の三諦を明らかに、成るべく耳に悪聲を聞かず、目に悪色を見ず、而して言を慎しんで、口に悪言を弄せぬやうにしたならば、幸に禍に免かれ、他の怨みを買ふこと杯が少いのであります、庚申の猿は即ち此戒めでありまして、古人の座右銘に

壁有耳德利有口
神棚庚申至極好
滅多差合實難言
不見不聞不言猿

とあります通り、人は滅多な事をべら／＼と口外すべからざるもので、ツイ何氣なく言つた事が、先方の感情を害したり、或は又先方の親類の事などを思はず悪口して居つて後より氣が付いても取返しつかぬ如き悔があるものでありますから、何でも神棚の庚申を學んで見ず聞かず言はざるの三猿を座右の戒とするのがよいのであります。然しながら、人間は慾の凝まりと諺にもある通り、見ず聞かず言はざるの三猿を學んでも、どうも心が狂ひ出して止め途なく、飲食の欲、金錢の欲、或は酒色の欲などに溺れ易いのであります、之は畢竟心の修養といふものが足りないからであります、

古歌に

見ず聞かずいはざる迄はつなげども

思はざるはつなげれもせず

此思はぬやうにする、即ち色を見ても財を見ても直ぐ之に心を奪はれて意馬心猿を狂はすことのないやうに、よく此思ひを繋いで置くのが、即ち精神の修養といふものであります、例の蜀山人の狂歌に

かけ出す心のこまをひきどめて

しりぞくかたがましらなるべし

とありますのは、即ち意馬心猿の説明でありまして、心のこまが勇んでも直に之を引き止めて、先づ身を退くやうにするのが、人間處世上の要件であるぞと諭されたものでありますけれども、どうも「このみの多き秋のやまざる」即ち眼前に横はつて居る多くの榮華には人はどうも其心を惹かれ易いものでありますから、之も又も蜀山人の「溜池月」と題する狂歌にある通り

山王の猿となりてもとらまはし

數々黄金ため池の月

歌

此慾の爲に、たとひ成功しても世に悪名をのこし、又多くは成功せずして、禍と怨みとを身に引受けることとなるのであります、何と呉々も猿智恵は戒むべきことで、又精神の修養は之を怠つてはならぬではありませぬか。

11 一家團欒 (家庭の真趣味)

昔より家族は和合せねばならぬ、一家團欒の樂みほど此世に愉快なるものはないと、口癖のやうに言ふのでありますが、然らば現今の人は果して和合して居るか、將又家族打寄つて果してどれほどの樂みをして居るかといふに、どうも怪しいもので、内に居つてはクサク／＼して行かぬ、顔を見の胸の悪い氣持がする、腕白小僧は手ごつちよにあへない、先づ今日は單騎旅行と出掛けましたとか、或は有樂座へ御伴仰せ付かつた杯と頭を搔いて見て、兎角真正の和合も團欒もどうも發見することが出來ないのであります。これは一體全體何に起因して居るかといふに、其原因既に頗る遠く

して深いのであります。

元來日本國ほど家族制度に物事のよく整つた國柄はないと、外國人は頗る稱歎して居るほどであるにも拘はらず、個人の家庭はといへば、反對に至極冷酷であつて淡泊極まるものであります、年齢に達すれば妻は迎へるもの、年寄れば邪魔にせられるもの、若い嫁はいちむべきもの、金を儲ければ道樂すべきもの、それが即ち甲斐性ものといふやうに互にイタチこつこをして集合ひ所帯をやつて居るに過ぎないと考へて居るのが先づ十中の八九を占めて居るであります、否な考へて居るばかりではない、實に之が其道の實踐躬行家であります、情けないことではありませぬか。

此習慣が惰力となつて殆ど數百年間も、我が國の家庭にヨビリ付いて居るのであります、それゆゑに日進文明の大御代に際會して今日の日本人は十分に學問も修め經驗も積むことも出來るのであります、學問をして少し出世をすればするほど悪賢くなるか道樂になるか冷酷の人物になつて仕舞うのであります、今日新聞紙の三面記事に現

はれる事實が即ち此家庭内の我儘から生じて居るのでありまして、其中の最も猛烈にして破綻を來したものが世に現はれるに過ぎないのであつて、委しく調べて見たならば我國の家庭を擧げて、一々三面記事の材料たらぬものは殆どないほどでありませうそこで予輩は世人に向て眞の一家團欒といふことを研究して今少し家庭内の積弊を一掃し、清新なる空氣を通して貰いたいと思ふのであります、それには第一に主人より其品行を直して貰はねばならぬ、若し品行の正しい人であれば更に人格といふものを重んじ、品性の修養をやつて貰ひたい、之と同時に主婦なる人に其平生の心掛を眞直にして貰はねばならぬ、若し幸に其心掛が眞直であるなれば進んで必ず之を日々に行爲に實現して貰ひたい、兎角現今の主人は、己が家庭を重んじなくて外遊びを好む、己が家名を重んじなくて不道徳をする、妻君も之に連て家政を旨く遣り繰つて先づ己が身なりを拵へることを専一と心掛ける、身なりが出来た一ツ人に見びらかせうといふ、極ケチな虚榮心から遊山芝居と出掛ける、そこで主人も主婦も常に善い評判

ばかりは起らずして悪い噂が立つ、それでも御本人は實に洒々落々たるものである、これでは社會の制裁も何もあつたものではない、家庭の取締などは固より付かない、此に於て舅姑も子女も別々で思ひくである、悪い僕婢が令息令嬢をそゝのかすのも無理はない、乗すべき隙間だらけ故である、否寧ろ乗せしむべき間隙を與へて居るのである、かくて一家團欒といふのはお正月かお節句にはんの形ばかりの御馳走を食ふ位に止まるのである、何と心外千萬なことではありませぬか。

眞の一家團欒を爲すには矢張り形式的でもよい、西洋風に聖日とか精進日を定め又毎日の日課を定めるがよい、一箇月に一度か二度の聖日精進日には家人一室に集つて所謂威儀を正し其期間の出來事を語り合ひ話し合つて修養上に資すべきである、其中には失策話もあらうし、眞面目な話もあらう、かくて後一定の教訓本でも選んで之を讀み精神修養の助とするがよい、即ち古人の辛苦經營談、立身出世談、貞操談、忠義談などを耳にして居れば其時だけでも、氣が引立つ、戒めにもなる、其上にて御馳走もし

たり、娛樂も共にして家人打寄つて清遊する、こととするこれが實に水入らずの遊び方である、之が所謂一家の團樂である。

此聖日精進日と共に、月々の課程といふものを定めて、夫妻子女個人々々に之を實行せんと志し、又食事には食卓に於て前日及び其日の出來事を語り反省もする悔悟もする、時には教訓談をも試みる、これは主婦なる人より先づ率先實行するやうにせねばならぬ、主人も若し在宅すれば之に列座して無論家族に對して教訓的態度を以て世事を談じ、修養を勉めしめねばならぬ、此場合に或は一定したる教訓本を用ゐて夫妻子女が輪讀するのも一方法であらう、

要するにかゝる家庭に人となる子女の幸福は如何であらうぞ、品性は自然に高まるのである、道徳心は自然に養はるゝのである、奮發心も自然に起るのである、即ち成長しても道樂にして意氣地なく無慈悲に育つことは必ずないのである、而して日常之が指導者たり模範たる夫妻は己れ又大に戒め勵む所があつて、之を無節制、放縱度なき

時に比して、其進歩必ず見るべきものがあるに相違ない、若し其人に父母あり舅姑あらば、其人々も必ず之が感化を受けて溫柔なる情を以て其子孫の保育者となられるに相違ない、一家はかくてこそ眞の團樂和偕を得るものである。

以上は理論ではない、出來る範圍に於て成るべく實行して、其良果を收むることを期すべきであります。

12 處世の五徳 (自他に對する道徳)

處世と云ふのは世渡り、世の中を旨く渡ること、吾々お互が此の世に生れて來たからにはどうか、旨く世渡りしたいものとは誰も思はぬ者はない。小供の時にしても仲よくつき合ひて面白く遊び大きくなつて家を持つやうになつても旨くやつて行くことが望ましいものである、又貧乏であれば金持になりたいとか、身分が低ければ出世をしたいとは誰しも考へぬものはない、此世渡りの法はなか／＼六つかしいことで

あります。

然らば、其はさうすればよいか、或人は學問や知恵があれば十分世渡りがうまく出来るといふ、然しそはいかない、若し學問や知恵のみでうまくゆくものならば、立派な紳士紳商が卒へ入ることはない筈である、之は學問才智のある爲に却つてさういふ結果になつたもので、之にはさうしても道徳といふ根底がなくてはならぬ、自他に對する道徳を五つに分て少しばかりお話しませう。

(一) 從順、人は何事にも温和なく素直にする事が必要である、自分ばかりの勝手をせず我儘を云はず、よく父母兄弟の言はるゝことを聞いて、其心に逆らはぬやうに心掛ねばならぬ、又さし出がましきことをせぬのも、何より大切な心得である。

(二) 謙遜、他の人に對して威張るといふと直ぐあの人は高慢であると云はれる、之に反して謙遜であると、人が自然に奥床しい方であるといふ、されば自ら求めて自分の身を狭めるやうな事をせず、何事にも人より謙だりて静かにすることは誠に必要で、

前の從順と並立して女子の最も心得べき道徳である。

(三) 忠實、戊申詔書の中にも「忠實業ニ服シ」と仰せられてある、此の忠實といふ事を容易く云ふと自分の業務に對して氣軽く、忠實にすることで、お父さんやお母さんの命令を應劫がらずに直ぐハイとするといふのも忠實の心得である、此心掛を以て他の人に對しますれば親切となる、かく自他の別なく手早く氣軽く、どこまでも親切にすることが必要であつて、之が忠實の趣旨である。

(四) 度量、度量といふのは廣い心といふことで、廣い大きい心であれば物事に屈托せぬ、又腹をも立てぬ、些細な事に腹を立て種々の心配をするといふのは、兎角女に多い癖と見へてつい世の中がいやになつて、無分別な事を爲し或は衝突して、取返しのかぬ事をもするといふのは、よく新聞にも見へて居る、されば女子は一層度量を大きくするといふことを勉めねばならぬ。

(五) 理想、之は考を高く持つ事である、今日此儘でよいといふのは卑屈マア／＼さう

にかならうといふのは因循な考といふものである、之は六づかしいことでも何でもない、心掛一つであつて、此心掛によつて勵みも出来何事も愉快にやれるのである、向上進歩といふことは家庭を治める女子に最も必要である、此理想と度量とさへあれば自分で自分がいやになつたり、アゝつまらぬといふやうな煩悶はない、明治以後の今日は昔とは異つて、自由自在に出世が出来る世の中でありますから、女子といへども理想を高く持つて進まねばならぬのである。

以上の五徳を以て進み行けば世渡りが上手にできるのである、そして之が養をするのが學問である、之を働かすのが才智である、それを道徳を顧みずして、只才智や學問丈では世渡りをするから失敗するのである、つまり道徳に添るに學問才智を以てしたならばうまく世渡りが出来る、智識や才氣ばかりで道徳を顧みないと、曩の日糖事件のやうな事になる。

皆さんは西の市でおかめを買ふて歸る人を見るでせう、おかめは上方でお多福と云ふ

支那では之を三平二満と云ふ、三平とは三つ平たくて二つ高い意で、つまり額と兩頬が平たくて、臍と胸とが出て居るのをいふ、至つて不恰好なものであるが、人は何故こんなものを買ひに行くかといふと、是には譯のあることで、要するに前にいつた人の保つべき五徳を此おかめが備へて居るからである、古人のおかめの贊に「額出でたりと雖出すが、頬高しと雖高ぶらず、鼻低しと雖心至て高し」といふのがある、大きな胸と腹があるから何事をもこらへて容れて行くのである、そして謙遜で理想が高いから、進歩するに相違ない、それでおかめの如くであれば、人は必ず出世するといふ意味から、之を年々歳末に買ひ買めて家に飾るやうになつたのである。又、支那に孫昉といふ人があつて自ら四休居士と稱して居つた、四つに満足して居るといふのである、四つとは一は香の物に茶漬で満足する、二に破れた衣物でも寒くさへなければ満足する、三に御多福の婦人で満足する、四に食らず妬まずに年老いて行く程満足はないとの意である。之を詩の儘に示せば次の如くである。

龜茶淡飯飽即休

補破遮寒暖即休

三平二滿過即休

不貪不妬老即休

又西川如見といふ人の語にも妻は家を修める爲故醜にても宜し心の美を貴ぶといふ意があるが、ツマリ之は五徳を備へる居ることを望んだのである、即ち容貌は悪くともお多福は執着心なく、嫉妬心なく心廣くて静かである、腹はいつも安泰にゆつたりして居るから、煩悶もなく、世の中の事に仕損じもない、腹が据はりて沈着であれば又何事にも狼狽をせない、物事がいやになつて鐵道往生するなごいふ考は出ない、かういふ人を妻に迎えたらば其一生は安全であるといつて居るのである、又或人がお多福の書を讀きて其上に讚を致しました。

われ乍らなほ美しき姿かな

心醜くき人にくらべて

假令いかに別嬪でありましても高慢で我儘な性質の人なれば其心は醜いのである、

其れよりはおかめの如き不別嬪でも心の美しい方がよいといふ意味であるが、私は此歌を讀んで大に趣味のあるのを感じた。

然るに世の中には女子の方で兎角五つの徳を缺いて居る人があるから、一家の中がいつもごたくして居るのである、之は多く自分勝手の我儘を通すからである、親子の間夫婦の間に少くないのですが、特に嫁さんが他家から來ますとお母さんが違ひますので、姑の方ではどうも嫁は高慢で妾の云ふ通りにせないと困ると云ひ、嫁の方では姑は分らずやである云ふて争ひが起つて參る、嫁と姑との間柄は犬と猿又は横文字の如くで姑から見ると頗る「よめにくい」なごとも云ふてあるが、是の姑嫁の争ひが一番一家内に風波を立てる基であつて、是も雙方に五つの徳がないから起るのである、もし五つの徳さへあつたなら一家は平和、家内は安穩幸福で暮して行くことができる。

之は昔の話であるがある、家で姑と嫁とが例の如くに仲がよくない、朝から晩まで二

人が睨めくらしをして居る、嫁は實家へ歸りたいのは山々であるが、實家の親人は嚴重であるから、一旦嫁いては歸つて來ることはならんと申す、嫁女頗る仕方なしに辛抱して居つたが終に辛抱が出来かねたと見えて一策を案じ出し、醫師の處へ參つて、實はかういふ譯で姑が憎くて憎くて溜りません、何とかして無き者にしたいと決心して來ましたから、何か毒藥を頂きたいと言ひ出した、醫師は之を聞いて驚いて、飛んだ事をおつしやる、かりそめにも親と名のつく者を殺すとは大それた、其やうな事は私に出来ませうかと、毫も取りあいませんで嫁さん一時は落膽したが頓て醫者に向ひ、妾も一旦かういふ謀を貴方に御話した以上、貴方が聽いて呉れないからとて、此儘に濟まされません、妾は決心しましたから、河なり海なりに身を投げて死んで仕舞ひますと血相かえて駆け出した、之を醫者が驚いて後ろより抱きとめ、さういふ御決心ならば何とか藥を都合してあげませうと云ふて漸くに承諾し一室で調合して來て毒藥を嫁に渡した、そして云ふには此は頗る劇しい毒藥である、迎も一時に用ひては餘り

に利き過ぎて忽ち死ぬ、さうなる時には變死となつて嫌疑がかゝり面倒が起る故、三週間の内にだん／＼に毒が全身にまわるやうに調合して置いた、さればこれを煎ずるには目を閉いで煎じ少し宛料理の中へ入れなさい、然しお母さんに氣取られてはならぬから三週間は我慢をしてお母さんなるべく大切に、旨い御馳走をこしらへて上げなければなりませんと申した、そこで嫁さんは喜んで家に歸り、その日から姑を大切にすること、平生と全く違つて、床の上下しから食膳の注意までそれは／＼手の届く限り御機嫌を取つたので、流石やかましかつた姑も餘り優しく取扱はれ、三度々々の食事も御馳走づくめ故今更前の事を後悔して、嫁女が大切に、言葉遣から何やらすつかり以前と異つて、三日五日十日、二週間目になると全く自分の娘も及ばぬ位に優しくするやうになつた、そこで嫁の方でも何と云ふ優しいお母さんになられた事であらう、こんな方とは知らないで藥を盛つて殺さうとは、とんでもない量見を起したものと今更自身で自身を悔つたが、然し最早毒を毎日食膳に入れて二週間に及んだ

故、モウ一週間すればこの優しいお母さんが亡くなることかと思ふて起つても居ても居られぬ、そこで又もや先きの醫師へかけ付けて「誠にすみませぬが私はまあ何といふ恐しい考を出したのでありませう、あのやうに親切なお母さんを私が殺してどうしませう、どうか解毒を下さいませ、舊通りの御身體にせねばなりませぬ」と涙乍らに歎願に及んだ。

其時醫師は「そんな事云ふても、貴女は初めに毒薬を是非下さいといふたではないか」と申すと、嫁は今迄の一伍一什を話して全く只今後悔しましたと十分悔悟の狀態が顯はれたので、醫師は「成程さうなければならぬわけ」と膝を打つて「扱て私が上げた薬の残り一週間分を持つて来たなら御出しなさい。それは決して毒ではありませぬ、全く鯉節の粉であまりす、されば姑御の壽命は萬々歳です」といつたので、嫁さんも意外に驚き、且は安心して厚く禮を述べました、其時醫師は諄々として婦道の大切なるを説いてきかせたといふことであります、古歌にもあります通り、「我よきに人の

悪きがあるものか、人の悪きは我悪きなり、又「さるといふ姑に嫁はいぬといふ、犬と猿との喧嘩なりけり」で、これは全く雙方の心得方が悪いからである、されば女子は特に婦徳を重じ、前にいふた五徳を守り其本分を盡さねばならぬことであります。

世の中に兎云ひ角云ひむづかしさ

人をば人が飽果つる也

荒木田守武

世中は目に見る事をほんとせよ

聞ぬることは變る物也

同

人をわが心の如く思ひなばさほひ

することあらん世の中

同

世の中はしつ山がつと思ふとも

梅子心おこすべからず

同

好々と人には云ひて世の中に

人事のじれい知らぬ者あり

同

●始末の事

これは吝きことにあらず。始めと末とのことにて、一日の計は朝にあり。一月の計は朔日にあり。一年の計は元旦にありと申して今日の事は、今朝にとくと工夫し、一月の事は朔日より、心がけて、三十日を思ひかんがへ、一年の事は元日より極月三十日まで、の事を、とくと極むべきといふ事なり。誰しも三百六十日をふれば、大晦日となることをしなから、大晦日までの工夫勘定をせずして、うか／＼と暮して、そのつもりあはぬゆる大晦日の来るを今さらの様に思ひ、俄かに來りたる如く當惑し、かけ拂ひも大に不足し、何とも先方へ申譯なきやうになる、これ皆始末の二字にこもりて、始めありて末まで行きとゞがぬ故としるべし。

油断せぬ始末の花が暮に咲

資料訓 人の一生(終)

大正三年七月廿五日印刷 (大正布教文庫第一編)

大正三年七月廿八日發行 (定價金三十五錢送料金四錢)

著述者 足立栗園

發行者 東京市麻布區飯倉町五丁目四十四番地 森江佐七

印刷者 東京市芝區三田四國町二番地 門岡甲次郎

發賣所 東京市本郷區二丁目 森江分店

發行所 東京市麻布區飯倉町五丁目 振替口座東京三七二番 森江本店

電話芝一二七四番

不許複製

(人の一生)

東京。京都。名古所
 鴻佛土融社誠進堂
 教報社教館木書堂
 館社東教京堂
 名古所 (屋古堂) (都法文館出雲寺書店)

